公益財団法人　日本ハンドボール協会 編
令和元年9月1日発行（毎月１回１日発行）　通巻594号

ハンドボール

9
SEP.2019
No.594

- 第22回男子ジュニア世界選手権
- 第15回女子ジュニアアジア選手権
- アジアU-22（男子・女子）ハンドボール選手権
- 高松宮記念杯第70回全日本高校選手権大会
- 第21回全日本ビーチハンドボール選手権大会
- 第27回全日本マスターズ大会

公益財団法人　日本ハンドボール協会

挑戦を続けた日々が、大舞台へと届くように。
諦めない気持ちと、熱い感動を、世界中へ届けるために。

ヤマト運輸はジャパンハンドボールオフィシャルパートナーです。

ヤマトホールディングスは、
東京2020オフィシャル荷物輸送サービスパートナーとして、
東京2020オリンピック競技大会を応援しています。

TOKYO 2020

ヤマトホールディングス

東京2020オフィシャル荷物輸送サービスパートナー
ヤマト運輸はヤマトホールディングスのグループ会社です

プレミアム・リゾートという選択

一戸建て住宅型有料老人ホーム

メディケアサポートHABA

2017年12月伊豆高原にオープン

12/1(金)より予約申し込み開始！

☎ 0557-51-7887 （担当 土屋・はば）

私たち株式会社ユリカコーポレーションは、お客様方へ不動産を用いたライフプランをご提案しております。自社ブランドである『YURIKA ROSE』(ユリカ ロゼ)シリーズや、社有物件も展開！
待望の2020年『東京オリンピック』まで、いよいよカウントダウンが始まりました。
弊社も選手達と共に邁進していきますので、どうぞよろしくお願い致します。

私達、株式会社ユリカコーポレーションは
女子ハンドボールを応援しています!!

株式会社ユリカコーポレーション

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-6-2 神田セントラルプラザ1202

TEL：03-3525-8986 / FAX：03-5295-8188　　http://yurika-co.jp/

あたたかい空へ。あたらしい空へ。

ANA Inspiration of JAPAN

A STAR ALLIANCE MEMBER

国内線のお問合せ 0570-029-222（全国一律料金） 国際線のお問合せ 0570-029-333（全国一律料金） www.ana.co.jp

Eat Well, Live Well.

AJINOMOTO

Behind Your "Best"

車いすバスケットボール
鳥海 連志 選手

バドミントン
松友 美佐紀 選手

競泳
瀬戸 大也 選手

バドミントン
高橋 礼華 選手

ハンドボール
原 希美 選手

ハンドボール
永田 しおり 選手

ハンドボール
横嶋 彩 選手

空手
喜友名 諒 選手

5人制サッカー
加藤 健人 選手

5人制サッカー
黒田 智成 選手

パラ水泳
一ノ瀬 メイ 選手

パラ水泳
木村 敬一 選手

パラ水泳
山田 拓朗 選手

©The Asahi Shimbun via Getty Images
©Atsushi Tomura/Getty Images for Tokyo 2020
©Junya Nishigawa - PARAPHOTO/Getty Images
©Ian MacNicol/Getty Images ©JBFA ©X-1

味の素㈱は「勝ち飯®」メニューを選手に提供することで、東京2020オリンピック・パラリンピック日本代表選手団を応援しています。

＼ がんばる人のチカラになるごはん ／

勝ち飯®

オリンピック・パラリンピック日本代表選手団が、世界で勝つために。
味の素㈱は、独自の栄養プログラム「勝ち飯®」メニューで、
彼らのカラダづくりを支えています。

TOKYO 2020 | AJINOMOTO | TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES

東京2020オフィシャルパートナー
(調味料、乾燥スープ、アミノ酸ベース顆粒、冷凍食品)

ハンドボール 9月号 No.594

【表紙の写真】
第22回男子ジュニア世界選手権

CONTENTS

07 **副会長就任にあたって**――(公財)日本ハンドボール協会副会長・野呂洋子

第22回男子ジュニア世界選手権

08 最終順位
09 メンバーリスト
10 男子 U-21 チームリーダー・佐藤壮一郎、監督・吉村　晃、キャプテン・末岡拓美
14 アシスタントコーチ・船木浩斗、分析・市村史朗、ドクター・大西信三
16 戦評

第15回女子ジュニアアジア選手権

18 メンバーリスト
19 団長・田口　隆、女子 U-20 監督・新井翔太、キャプテン・上田遥歌、トレーナー・佐野裕美
22 戦評

24 **アジアU-22(男子・女子)選手権**

25 メンバーリスト
26 アジア U-22 選手権大会に参加して（総括）――団長・松　喜美夫
27 U-22 男子監督・實方　智、男子キャプテン・山本晃大
29 U-22 女子監督・佐藤　晃、女子キャプテン・秋山静香
31 男子・女子戦評

高松宮記念杯第70回全日本高校選手権大会

35 最終順位
37 大会を終えて――熊本県高体連ハンドボール専門部委員長・松本幸介
39 男子優勝：県立香川中央高校――主将・田井健志
40 女子優勝：明光学園高校――主将・柿添まどか
41 男子・女子戦評
43 男子・女子勝ち上がり表

第21回全日本ビーチハンドボール選手権大会

45 大会を振り返り――沖本哲郎
46 男子優勝：東海 Weeds!A――島田恭輔／女子優勝：KUNOICHI――大沢　萌
47 男子・女子戦評

第27回全日本マスターズ大会〈総合型〉(交流・順位同時)

48 全日本マスターズハンドボール北海道大会実行委員会・山崎英一

50 **【熊本通信】**2019 女子ハンドボール世界選手権大会の交通情報を掲載しました！

がんばれハンドボール 20 万人会「サポート会員」7 月入会・継続会員

【埼玉】園部英昭、佐藤秀明、佐藤三枝子**【山梨】**古屋幸男、古屋淑絵**【愛知】**井上和子、安藤　孝、山岡真紀、竹内佐織、竹内　聡、藤村ゆかり、山路安奈、松岡順子**【三重】**山本文男

次号 10 月号（No. 595）は 10 月 1 日発行予定です。

副会長就任にあたって

公益財団法人 日本ハンドボール協会 副会長
野呂 洋子

今年７月よりハンドボール協会の副会長に就任いたしました野呂洋子です。先日、初めてハンドボール協会の臨時理事会に出席いたしまして場違いなのではないかと思いました。

というのは、私は中学時代、高校時代はハンドボールに明け暮れておりましたが、大学入学後以降はハンドボールから離れていたからです。

当時、女性のハンドボーラーは少なく、将来の展望も見えなかったため、普通に大学に進学し実業の世界で生きていこうと思い、市場が拡大していたIT企業に勤務して独立も考えておりました。その後、女性でも仕事と結婚と子育てを両立するためには家業を持つ男性との結婚が良いだろうということで、画廊という仕事をしている男性と結婚して一緒に銀座で画廊を経営しています。スポーツの世界からIT企業、そして美術業界と全く違う世界を経験して37年ぶりにハンドボールの世界に戻りました。

私にとって、ハンドボールは人生の前半に人間形成の重要な部分を担っており、夫と経営している画廊が2006年のリーマンショックで非常に厳しい局面を迎えた時に、高校時代のハンドボール部監督の「最悪の時の自分がおまえの実力だと思え」という言葉を思い出し、その言葉に奮起して画廊経営を立ち直らせてもらったと今でも感謝しています。

今回のご縁は、ロータリークラブで元日銀総裁の福井俊彦氏より界友会にお誘いいただき、そこからハンドボール協会のHP「我らハンドボール応援団」に掲載いただいたことが切っ掛けになっていると思っています。その後、湧永会長と友人を通して出会い、日本ハンドボールの未来を変えていきたいという強い意志に共感いたしまして、仲間になることを決心いたしました。

今年は熊本で女子ハンドボール世界選手権、来年は東京オリンピックと、ハンドボール界にとって大きなイベントが目白押しです。そのような大切な時期にハンドボール協会に関わることができる私はとても幸せだと感じています。今までに経験してきた組織とは違う空気を既に味わっています。多様性が組織を活性化すると信じておりますので、私の存在が少しでもハンドボールの発展に貢献することを念頭に行動していきたいと思っています。来年行われるオリンピックは「スポーツとアートのマリアージュ」と近代オリンピックの父といわれるクーベルタン男爵が言っておりました。これからは日本でもスポーツとアートのコラボレーションが始まる時代だと確信しており、私は両方の分野を主軸に経験できることを光栄に思っています。日本では意外かもしれませんが、スポーツができる人は芸術的なセンスも持っており、海外では両方ともプロ級の人を拝見することがよくあります。

選手は勝つことが何よりも大切ですが、協会の一員として、この世界的な大イベントを日本ハンドボール協会の発展のためにどのように活用するかという別の視点から貢献できればと考えております。

第22回 男子ジュニア 世界選手権

写真：RFEBM / J. L Recio

開催期間：
2019年7月15日～28日
開催地：スペイン

最終順位

優勝：フランス
２位：クロアチア
３位：エジプト
４位：ポルトガル
５位：デンマーク
６位：スロベニア
７位：チュニジア
８位：ノルウェー
９位：ドイツ
10 位：スペイン
11 位：スウェーデン
12 位：ブラジル
13 位：セルビア
14 位：アイスランド
15 位：ハンガリー
16 位：韓国
17 位：バーレーン
18 位：日本
19 位：ナイジェリア
20 位：チリ
21 位：アルゼンチン
22 位：アメリカ
23 位：コソボ
24 位：オーストラリア

■メンバーリスト

役職	氏名	フリガナ	所属	
チームリーダー	佐藤壮一郎	サトウソウイチロウ	(公財)日本ハンドボール協会	大同大学
監督	吉村　晃	ヨシムラアキラ	(公財)日本ハンドボール協会	㈱豊田合成
コーチ	船木浩斗	フナキヒロト	(公財)日本ハンドボール協会	中京大学
GK コーチ	比嘉　薫	ヒガカオル	(公財)日本ハンドボール協会	山形県立北村山高等学校
トレーナー	水野賢太	ミズノケンタ	(公財)日本ハンドボール協会	ずのアスリートオフィス
分析	市村志朗	イチムラシロウ	(公財)日本ハンドボール協会	東京理科大学
ドクター	大西信三	オオニシシン ゾウ	(公財)日本ハンドボール協会	筑波大学附属病院

背番号	ポジション	氏名	フリガナ	所属	出身校
1	GK	平尾克己	ヒラオカツキ	筑波大学	近江兄弟社高等学校
2	PV	髙野颯太	タカノソウタ	筑波大学	浦和学院高等学校
3	CB	末岡拓美	スエオカタクミ	福岡大学	瓊浦高等学校
6	LB	服部將成	ハットリマサナリ	明治大学	中部大学春日丘高等学校
7	RB	徳田廉之介	トクダレンノスケ	筑波大学	岩国工業高等学校
11	RB	藤田龍雅	フジタリュウガ	中央大学	法政二高等学校
13	LW	矢野世人	ヤノセイト	筑波大学	大阪体育大学浪商高等学校
15	RW	櫻井睦哉	サクライトモヤ	明治大学	藤代紫水高等学校
16	GK	中村　光	ナカムラヒカル	日本体育大学	藤代紫水高等学校
17	PV	朝野翔一朗	アサノショウイチロウ	筑波大学	氷見高等学校
21	CB	中村　翼	ナカムラツバサ	中央大学	北陸高等学校
22	GK	高橋　海	タカハシカイ	明治大学	法政二高等学校
25	LB	川﨑　駿	カワサキシュン	日本大学	北陸高等学校
27	PV	大杉拓巳	オオスギタクミ	HONDA	四日市工業高等学校
29	PV	磯田健太	イソダケンタ	関西福祉科学大学	大阪偕星学園高等学校
30	RW	西村洋亮	ニシムラヨウスケ	中部大学	鹿児島工業高等学校
31	LW	青　雅俊	アオマサトシ	中央大学	昭和第一学園高校
32	LB	露木　涼	ツユキリョウ	明星大学	藤沢清流高等学校

好評発売中

ハンドボールスキルアップシリーズ

目からウロコのDF戦術

スポーツイベント・ハンドボール編集部 編著

B5判　188ページ　1,800円+税　発行元 グローバル教育出版

バックプレーヤー、サイドプレーヤー、ポストプレーヤー。ポジションごとに求められるものは大きく変わります。コートプレーヤーの3ポジションについて、本書ではそれぞれの役割、求められる能力などをわかりやすく解説しています。

既刊

目からウロコのＤＦ戦術
1,800円+税

株式会社スポーツイベント TEL:03-3253-5941　ご注文はオンラインショップから→http://sportsevent.shop-pro.jp/

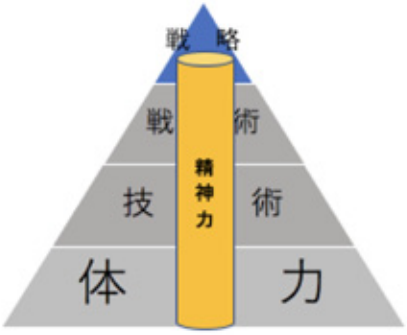
第22回男子ジュニア世界選手権の大会を終えて感じたこと（想いを繋ぐ強化）

男子 U-21 チームリーダー　佐藤 壮一郎

キーワード：想いをつなぐ、コンディショニング、失点の多さから、過去最高コンタクト、大会直前ヨーロッパ遠征、アスリートファースト、素直な勤勉な選手、ポスト攻守、サイドシュート決定率、勝負強さ

先ず初めに、大会出場に際しまして、心良く選手・スタッフを派遣して下さった所属チーム・ご父母の皆様方に心より御礼申し上げます。思い起こせば、2015 年に監督として、ブラジルで開催された世界選手権に 32 年振りにアジア予選を突破し、出場させて頂きました。当時のスタッフ・選手達には、我々の目的は、日本においてハンドボール競技をメジャー競技にする！という想いを伝えておりました。現在、日本代表の核となり、また、ほとんどの選手達が日本リーグチームに所属し、活躍している姿を嬉しく思います。

それでは、競技力向上ピラミッド（図１）により、2015 世界選手権（過去）と 2019 世界選手権（現在）の大会比較を定性的評価において比較してみます。競技力向上ピラミッドとは、底辺から体力、技術、戦術、戦力となったピラミッドであり、その中心（軸）を精神力としています。体力では、過去大会においては、２戦目までは、コンディションが良く戦えていました。しかし、３戦目以降は、DF や BC での運動量が落ち失点が増えたことを記憶しています。技術については、過去大会においては、DF にて 1:1 で大型選手に対して、疲労蓄積から安易に利き手側を突破されていました。今回は、利き手側に対して身体を使った激しいコンタクトや攻撃終了後の素早い帰陣が大会を通じて出来ていたと感じます。戦術は、セット OF において、ヨーロッパ諸国が実践している OF パターンや劣勢時における７人攻撃が浸透されており、イージーミスや枠外シュートが少なく、ゴールにシュートが到達していました。戦略は、攻撃回数を抑制し、どのチームとも互角に戦えるように、また、失点に対して体力をフルパワーで使う考え方で大会を乗り切ったと推察します。精神力については、コンディショニングに対し、非常に意識が高く、食事の栄養摂取や体重管理、試合後の疲労回復対策など、最善な取り組みをしていました。また、大会前にポルトガル・フランス遠征において、大会上位国とトレーニングマッチを経験し、接触の強度などがわかっていたことは精神的に優位に働いたと考えます。



競技力向上ピラミッド（図１）

結果は、前回大会と同じく 18 位という結果でした。しかし、前回大会の課題を踏まえて、大会に対して準備したことは、日本の継続する強化に繋がると評価しています。今後の強化の方向性については、想いと経験を強化に繋げて行くことが重要であると考えています。理由は、日本が世界において結果を出すために積み上げて来たトラックの荷物（経験）を監督（運転手）が変わり、荷物（経験を）を忘れ、新しく積荷を乗せて出発することは避けたいからです。想いを繋ぐ強化と今後の課題を（表１）にまとめましたので、ご参照ください。

継続させる強化と新たな課題（表１）

	継続させる強化	新たな課題
体力	①登録データベースを活用した大型選手発掘 ②継続した食事体重管理 ③連戦対応のコンディショニング	
技術 戦術	①ステップワークドリル ②世界が実践している Of パターン	①優位な状況を判断した速攻での得点 ②ポストとの縦２：２攻守の精度アップ ③サイドシュートの確率アップ
戦略	①攻撃回数のコントロール	①フランスナショナルセンターとの連携
精神面	①スタッフ・選手ハンドボールに対する真摯な取組	①開幕戦や勝負のゲームの準備と平常心

上記を日本ハンドボール協会の各組織委員会に落とし込んで行くことが重要と考えます。

アジアチャンピオン・世界ベスト８以上になるために必要なデータを整理し、その数値を達成するために各委員会がアクションプランを立案、NTS を活用し、強化の考え方を浸透させる。同じ考え方で日本ハンドボールのスタンダードを共有することが必要です。最後に日本においてハンドボール競技をメジャー競技にするために、想いを繋げる継続した強化が必要であると実感しています。現在、ハンドボール競技は、JOC のランキングは、D ランクであり、E となれば、補助金の負担も更に軽減されるレベルが現状です。全員の想いは一つ、日本においてハンドボール競技をメジャースポーツにすること、そのためにハンドボール（スポーツ）の価値を高める行動を起こします。

第22回男子ジュニア世界選手権大会を終えて

男子 U-21 監督　吉村　晃

この度は U-21 男子日本代表の活動に多大なるご理解、ご協力頂き心より感謝申し上げます。

私にとって今回で２回目となる U-21 世界選手権であり、前回（'15 ブラジル大会）の課題解決に向け「国内・アジアとの違い」を理解することからチームは始動しました。

また、今大会の強化活動は 2017 年 12 月から続くものであり、内容・結果共に中期ピリオダイゼーションの一例として「世界の強豪に対抗しうる、日本のハンドボール」を議論する上で１つの指標になればと思っております。

基本的な強化戦略は昨年度の '18 U-21 アジア選手権（オマーン）と同様であり、詳細は機関誌№ 583、p15-20 を参照下さい。

【強化戦略】

まず、「世界の強豪に対抗しうる、日本ハンドボールのプレーモデル」を設定しました。次に、環境（開催地）・パワーバランス（対戦相手）を加味した大会戦略を立案し、最後に１試合単位のゲーム戦略を決定しました。実際の練習では非線形（波状）の戦術的ピリオダイゼーションでトレーニングを実施し、それを補足する形で体力・技術・心理面のベースアップに努めました。

【具体的なプレーモデル】

「攻撃回数 40 回（22-21 で競り勝つ）」
「世界トップクラスの接触強度・頻度を誇るディフェンス（2 分守り抜く）」
「ターンオーバーから人数をかけた１次速攻（4 秒でフィニッシュ）」
「7 人攻撃等でボールポゼッションを最大限生かした遅攻（2 分）」
「世界トップクラスのリトリート（バックチェック［3 秒で 6 人全員帰陣］）」

【トレーニング内容】

ピリオダイゼーション内のサイクルを大きく２つ（国内・海外）に分け、上記プレーモデルの副々原則（個人戦術）、副原則（グループ戦術）＋心技体のベースアップを国内で、主原則（チーム戦術）を海外で行いました。ピリオダイゼーション内全てのトレーニングセッションで「身体接触時の運動量」は最重要視されました。「運動量＝質量 × 速度」のため、スポーツ栄養学を取り入れ選手の体重を適切に重くしつつ（平均体重 87kg）、他競技（ラグビー・陸上）のエッセンスを積極的に取り入れました。各トレーニングユニットにラグビー同様タックルバッグを多く使用し、激しい接触への適応を試みました。また、静止状態から移動スピードを上げる取組み（スプリントトレーニング）を継続して行い、間欠性持久力を向上するため全てをサーキット化しました。各トレーニングユニットを２分単位で持続し、直後に強烈な 20m スプリント（速攻・リトリート）を繰り返し、常に心肺機能に高負荷をかけトレーニングしました。

［国内合宿（ANTC 利用）］

プレー原則に基づく副々原則（個人戦術）、副原則（グループ戦術）は全てポジション別に行い、試合で起こる特定の状況でチームの約束事に則り、適切にプレーするための反復を行いました。全てのトレーニングセッションは心拍計（ポラール）によって強度管理され、１日５回のセッション（メイン：３つ・サブ：２つ）を成立させるため、終了直後のアイスバス・30 分以内の 1800kcal 前後の栄養摂取（筋グリコーゲンの貯蔵）などコンディションのリカバリーを徹底的に行いました。

各強化合宿の間（1 ヶ月程度）では選手自宅でのコンディション管理状況（シングルレッグスクワット、３食）を動画や写真で毎日スタッフへ送付させ、合宿時にフィードバック（トレーナー・栄養士）を行い、進捗管理をすると共に合宿開始時のコンディション低下を防ぐ試みをしました。

［欧州遠征］

選手交代・退場によって起こりうる状況やチーム全体の戦術などの主原則（チーム戦術）は欧州遠征のトレーニングマッチで反復しました。実践形式のパフォーマンスを支える備品として、マウスガードとプロテクターパッド付インナーを全選手に着用させ U-21 代表５ヵ国と７試合（フランス・ポルトガル２回・エジプト・アルゼンチン２回・アイスランド）行い、大会で使用する全ての攻撃・防御戦術を求める強度で反復しました。

【大会期間】

大会開始１週間前からはトレーニング強度を調節し（テーパリング）、心身共に最適な状態を作り出し開催地へ４日前に現地入りしました。開催地ヴィーゴ（スペイン西部）は一般的なヨーロッパの夏期気候であり、日中涼しく日没が遅いため、時間感覚は日本と異なるものでした。また、スペイン文化では夕食を午後９時前後に摂るため、栄養摂取のタイミングも従来とは異なりました。幸い事前の欧州遠征で早めにヨーロッパ入りし、補食も大量に持参していたため気候・文化に対する順化はスムーズでした。試合日程は予選リーグでは連戦が２回、決勝トーナメントも連戦が続くため大会戦略は連戦対応型にしました（前回同様）。

「頻繁な選手交代（30 ～ 40 分 / 人）」

「長いボールポゼッション」

「９試合戦うことをイメージし、１試合ごとにリスクを冒していく」

ことを念頭に置き１試合単位のゲーム戦略を以下の様に設定しました。

「前半 15 ～ 20 分：試合の主導権を握りタイムアウトでメンバーチェンジ」

「前半 20 ～ 30 分：ボールポゼッションを高めて終了」

「後半０～５分：連続失点無し」

「後半５分～ 20 分：リトリート（バックチェック）意識最大」

「後半 20 ～ 30 分：再びボールポゼッションを高めて逃げ切る」

また各試合前には対戦チームの選手別に映像をまとめ、選手がスマートフォンなどのデバイスで共有することで、１対１の局面で心理的に優位に立てることができました。

メンバーチェンジを行う選手や７ｍスロー時のスローワー・GK には、予めその役割を伝え心理的な準備を促しました。

ハーフタイム（15 分間）での取組みは昨年度同様に実施しました。

・枯渇した水分・エネルギー補給のため経口補水液・栄養ゼリーなどを摂取

・前半でプレー強度の高かった選手はアイスバスに入浴（２分）、下半身の深部体温を適正化

（後半のパフォーマンス低下を軽減）

・「分析班（アナリスト）による GK へのフィードバック」です。

【結果】

予選リーグ５位通過でプレジテントカップに回り、最終的に 18 位（24 チーム中）で大会を終えました。目標としていた「決勝トーナメント進出、最終日まで試合を行う」はなりませんでした。皆様のご期待に応えることができずに大変申し訳なく思っております。

しかし、この世代で取り入れた強化戦略は一定の成果を出したと思っております。

従来の日本の傾向である「多失点・低 GK セーブ率」に対し、本プレーモデルは非常に効果的であり、どの強豪チームと対戦しても一定の成果（試合終盤まで競合い、得失点差を優位にする）を得たと思っております。スタッツを紐解くと失点ランクは２位（失点が少ないほど上位）、GK セーブ率ではチーム平均 30%（個人トップ 10 入り［36%］）また、攻撃面での手詰まり（２対２の弱さ）を補う７人攻撃で攻撃成功率は 10%程度向上しました（前回比）。

【考察】

従来、全てのカテゴリーで世界選手権は日本に対して厳しいものです。負けが込むと徐々にチームの凝集性が失われ、試合でのパフォーマンスが著しく低下しがちです。しかし今大会で我々は、７試合全てをプレーモデルに基づき最後までやりきることができたと感じております。それはチームとして今大会の戦略に手ごたえを得ていたからだと思います。

ただ上記プレーモデルが世界選手権を戦う上で不十分だったことは監督として猛省しております。U-21 男子の戦い方は前半 15 分で主導権を握り、逃げ切りを狙うものですが、世界選手権では、ほぼ全ての試合で後追いの展開になってしまいました。前半の戦い方については今後の課題として具体的な解決方法を模索していきたいと思っております。

最後は悔しい幕切れとなりましたが、これまでの強化戦略は全て記録として残しており、後々の報告資料として皆様がお目にかかる機会もあるかと思います。世界選手権で U-21 男子が得た成果･課題は全てのハンドボール関係者で議論され、本大会以降の全てのカテゴリーの世界選手権へ向け「世界の強豪に対抗しうる、日本ハンドボールのプレーモデル」を議論する上で一つの指標になればと強く願っております。

2017 年の 12 月から約 90 日間共に過ごした選手・スタッフ、強化活動に協力頂いた所属先・ANTC 関係者、またハンドボール協会事務局・強化本部・情報科学委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

第22回男子ジュニア世界選手権大会を終えて

男子 U-21 キャプテン　末岡拓美

まず始めに U-21 男子日本代表の活動に多くの支援、応援を頂き本当にありがとうございました。

私達は、前年度のアジアジュニア選手権で準優勝と言う成績を残すと同時に、世界選手権の切符を勝ち取りました。そのアジア選手権のメンバーを中心に新たなメンバーも加え構成された U-21 男子日本代表は、世界選手権前の欧州遠征を行いました。

6 月 27 日～ 7 月 8 日はポルトガルで 3 試合と単独合宿、7 月 9 日～ 13 日はフランスで 3 試合、スペインでの直前の試合も含め合計 7 試合を行ない、世界選手権に臨みました。

結果は予選リーグ 5 位で進んだプレジデントカップでバーレーンに負け、24 ヶ国中 18 位という結果になりました。

実際に世界選手権を終えて感じたことは、2 つあります。

1 つ目は戦い方の手応えです。この大会は日本の未来、日本の戦い方、我々日本が何をすればいいのかわかった大会でした。それは日本がヨーロッパ相手と戦って勝つには速攻をしないことです。なるべくボールポゼッションを高め、相手の攻撃回数を少なくする。バックチェックを徹底し、相手に速攻をさせない。常に高強度の DF を 60 分間維持させ、とにかく失点を抑えられるだけ抑える。もちろん数的有利でボールを運べる場合は速攻を仕掛けてもいいと思うが、それでも仕掛けない方のメリットが大きいと思います。そのメリットは日本がボールを持ち続けることで相手の攻撃回数が減り、速攻を走らないことで体力の維持ができ、DF の強度を保てるということです。相手の攻撃回数が減るということは相手が得点をするチャンスが減るということに繋がります。そのためにはやはりボールを持ち続けることが鍵となるので、すぐにボールを失う可能性の高い速攻は世界と戦う上ではあまり有効な手段ではないと言えます。

2 つ目に感じたことはフィジカルの差です。身長の差はあまりなくても、力の差は大きいものでした。

この経験から次世代の選手に伝えたいことは、相手と同じ土台にならなければ勝てないということです。そのため、日々の食事のバランスや栄養、それに加えて量も多く摂ることを心がけて欲しいです。もちろん体を大きくすることがメインですが、皆さんの行なっているハンドボールというスポーツは体が資本です。毎日の練習やトレーニングで体を支えているのは食事であることを忘れないでください。日本は食に関する環境はとてもいい国だと思います。当たり前にご飯を食べられることに感謝の気持ちを持って沢山食べてください。良くも悪くも日本のハンドボールの未来を背負っているのは自分だと自覚して、日々の練習やトレーニングを頑張り、一緒にハンドボールをメジャースポーツにしていきましょう。そしていつか一緒に日の丸を背負って世界と戦いましょう。

最後になりましたが、U-21 男子日本代表に関わっていただいた全ての関係者の皆さま、そして日本または現地で応援してくださった方々に感謝の気持ちを込めて世界選手権の感想を終えたいと思います。ありがとうございました。

第22回男子ジュニア世界選手権大会に参加して

男子 U-21 アシスタントコーチ　船木 浩斗

今回のジュニア世界選手権にコーチとして参加し、個人・2～3人のグループにおけるディフェンスについて肌で感じたこと報告します。

まず、吉村監督がこのチームにおいて主に採用したディフェンスはオープンな 6-0 システムでした。それに対して、対戦したチームのほとんどが「バックプレーヤーの1対1」と「ゴールエリア付近にいるポストのスクリーン」を利用した攻撃を仕掛けてきました。

現役の選手たちは、小さな頃から受けてきた指導の過程の中で、バックプレーヤーとの1対1の場面においては「相手の利き手側を守る」ということが重要であることを十分に認識しています。とりわけ、髙野（筑波大学）や大杉（HONDA）など、ディフェンスラインの中核であった選手たちがそれを実践できていることをスタッフは感じていました。

しかし、ベンチで攻防を観察していると、日本の選手たちが目の前の相手やボールの流れを止めようとしても、パスを継続され、シュートまで到達されるシーンを何度も目にしました。それぞれの選手たちが1対1の場面において、あれだけ「バックプレーヤーの走り込むスピードを殺す駆け引きをし続けること」、「利き手側への位置取りをずらさないこと」、「ハードコンタクト」を徹底しているにも関わらず…です。これらのことは、「相手の利き手側を守る」という日本の選手の防御プレーが、総体的にはまだ海外の選手の攻撃プレーに対等ではないことを表していると考えられます。体格とパワーを持ち合わせ、ボールハンドリングと判断力に優れた海外のバックプレーヤーに対して、「相手の利き手側を守る」ことはもちろん、いかに「コンタクトしながらボール（を保持している腕）にプレッシャーをかける」のか、「相手の判断を迷わせる」のかが重要になってくると考えられます。さらに、まるでプロレスラーのような体格をしたポストプレーヤーによるスクリーンを利用した縦の2対2を守るには、より複雑な動きや判断が必要になってきます。

以上、当たり前のことと思われたかもしれませんが、コーチとして初めてジュニア世代の世界トップレベルを目の当たりにした者として書かせていただきました。日本国内における強化がさらに進み、世界に近づいていくためには、選手それぞれの体力、技術・戦術力の向上のために、「何を基本とするのか」をわれわれ指導者が考え続けていかなければならないと考えます。

第22回男子ジュニア世界選手権での分析担当活動報告

男子 U-21 分析　市村 志朗

事前準備

7月16日からの大会開催にあたり、事前の情報収集として、2019年1月から予選リーグでの対戦相手となる5ヵ国（セルビア・スロベニア・チュニジア・スペイン・アメリカ）の試合映像の収集を始め、吉村監督と共有し、それぞれのチームの大まかな特徴を明らかにしてから現地入りしました。

現地での活動

現地での分析業務は、アリーナでの業務とアリーナ外（主にホテル内）業務の2つに分類することができます。アリーナ業務では、試合時に、局面別の攻撃成功率やフリースロー回数などのデータを観客席にて PC を用いてデータ入力をしておりました。

ゴールキーパーよりハーフタイム時に自身のセービング映像を見たいというリクエストから、IHF が行っているライブストリーミング映像をもう一台の情報端末内に保存し、ハーフタイムにゴールキーパー達が前半の映像を視聴できるようにしました。ただ、今回のこの方法では、選手は見たい映像を探す必要があり、それに時間が必要となり効率的ではなく改善点が多くありました。

今回は試合映像はインターネットにて配信されていましたので自身での映像取得をすることはありませんでした。近年の世界選手権では必ずインターネットでのライブストリーミングがあることから、業務の軽減に繋がり非常に助かっております。しかし、スペイン、フランス、ポルトガルなどの多数の分析担当者を有するチームは、自身での映像取得と同時にリアルタイムでの分析活動を行っており、素早い情報のフィードバックを目指しているのであろうと推察しました。また、いくつかのチームでは、シニア代表チーム監督も視察に来ており、ハーフタイム時にはジュニアチームのスタッフと一緒になって控え室前で前半のデータを基にして大声で後半の試合についての議論を行っていたことには驚かされました。

アリーナ外業務としては、対戦相手チームの攻撃と守備の特徴を明らかにすること、新たな分析項目として、次試合の担当レ

フェリーの特徴を明らかにする分析を行いました。そして、これら分析した内容についてのミーティング用のプレゼン資料の作成を行いました。通常であれば、これらの分析に加えて、公式記録からの量的な分析と自チームの出来映えについての質的な分析も行うのですが、ただ、今大会では、対戦相手チームとレフェリーに対する分析に多くの時間を必要としたため、これらの分析まで手を回すことができませんでした。特に、自チームの分析をできなかったことについては、分析項目の優先順位を再度検討し、より効率的な作業ができるようにする必要があると反省しております。

すべての分析された映像は選手達に YouTube を用いて試合前日の夜に配信しました。内容は、対戦相手チームの攻撃パターン別の映像集、守備パターン別の映像集、選手別の映像集などでありました。内容の詳細については今後、ブログや講習会を通じて公表することができればと考えております。

最後に、ハンドボール協会の皆様、多くの映像を見ていただいた選手の皆様、吉村監督をはじめとするスタッフの皆様には、大きな成長のための機会を与えていただき、本当に感謝しております。また、東京理科大学、家族の理解に感謝しております。

長期遠征から本大会へ帯同したドクターの思うこと

男子 U-21 帯同ドクター　大西 信三

今回、個人的には４回目の世界選手権への挑戦であったが、事前の海外合宿期間を含めて約１ヶ月の帯同は初めての経験であった。これまで、熱中症の際に使用される経口補水液の試合への導入、時差対策などを帯同報告で挙げてきたが、今回私が主に注目したのは①アイスバス ②肩コンディショニングの２つである。

①アイスバス

吉村監督発案の元、本カテゴリー選手においては結成初期よりアイスバスを導入している。アイスバスとは、高強度の負荷がかかるトレーニング等を行った後に低温の水風呂に浸かることである。氷を使って温度調整をすることから「アイスバス」と呼ばれる（即席で温度調整すると実際に氷が浮いている状態のことが多い）。これにより体温の過度な上昇を抑えたり、筋肉の腫れを防ぐことで、筋のダメージ抑制・回復促進を狙うものである。

文献により異なるが、トレーニング直後に水温 10 ～ 15°で腰まで 10 ～ 20 分ほど浸かるというものが多い。今回我々が重要視したのは試合のハーフタイム、試合直後のアイスバスである。アイスバスには慣れが必要であり、10 分浸かるのには忍耐が必要であること、また多くの選手が利用するとその体温により容易にアイスバスの温度が上昇してしまう事、またハーフタイムに 10 分浸かるのは困難であること、など多くの理由により膝上まで１～２分間浸かることとした。これを遠征中のテストマッチ・本大会で継続的に行った。

実際に行ってみた効果を明確に数値化・文章化することはできないがその他のリカバリーと合わせ、外傷・障害で選手が一人も欠けることなく本大会に臨めたことを鑑みて「やって損はない」と思わせるに十分であると考えている。ジュニアカテゴリーのうちからこのような方法に慣れ、今後「本格的なアイスバス」に選手がチャレンジしていくことを切に臨む次第である。

余談であるがフランスで滞在した「メゾン・ド・ハンドボール」には 10°に設定された水風呂と、36°の温水風呂が隣り合わせにある設備があり、私の想像であるが、おそらく「スタンフォード式回復浴」が行えるようになっていた（興味がある方はインターネット検索を）。我々も少なくとも知識においては負けることがないよう、このような取り組みについて考え、チームサポートをしていきたいと考えます。

②肩コンディショニング

ハンドボールというスポーツにおいて、肩のオーバーユースに悩む選手は多く存在する。負荷強度の高いテストマッチを繰り返す海外遠征から本大会へ挑む場合にはなおさらである。今回私はこれら肩痛の選手の診察と施術を担当した。一概に肩痛と言っても様々であるが、これら肩痛の選手に共通して言えることはインナーマッスルの不均衡と肩甲骨・胸郭の動きの低下、肩後方要素のタイトネスなどである。１人の施術には 20 ～ 30 分かかり、多い日には１日５～６人になるため、これを一人のトレーナーが行うことは不可能である。選手はみな筋力増強のための「筋トレ」には熱心であるが、「うまく身体を使う」ようなコンディショニングトレーニングには注目していない (十分に教育されていない) 印象を受けた。肩を例に取り上げたがこれらのトレーニングをアンダーカテゴリーのうちに重要視し、行っていくことで強靭な選手を育てる一助になると考える。しかしこれには我々医事担当の意気込みのみでは空回りするもので、今回のように監督とコーチの十分な理解のもとで進めるのが理想であり、今後も提言を続けていきたい。

その他、氷の買い出しをはじめ苦労話は枚挙にいとまがないが、私に新たな経験の機会を与えてくれたハンドボール協会の方々、吉村監督をはじめとするスタッフ、そして何より選手たちに深謝して帯同報告とさせていただきたい。

戦　評

2019/7/16（火）：予選ラウンド　セルビア　21（9－9、12－10）19　日本

予選ラウンド初戦の相手は、昨年のヨーロッパ予選を９位で通過したセルビア。なんとしても勝利を手にしたい日本の先発メンバーは、左ウイングから矢野、川崎、末岡、徳田、櫻井、高野、GK 中村（光）。初戦の固さからか、開始から約６分間得点できずにいたが、矢野が獲得した 7mT のチャンスを露木がしっかりと決め、そこから日本は落ち着いた試合運びを展開する。ディフェンスでは、高野と大杉が何度も体を張り、セルビア BP 陣の強引な突破を阻止。また、GK 中村がナイスセーブを連発する。オフェンスでは、徳田のミドル、服部のロングなどが要所で決まり、また、川崎と矢野が連続して相手の退場を誘うなど、セルビアにペースを握らせることなく、９対９の同点で前半が終了する。

後半に入ると、前半の勢いそのままの日本は、中村の鋭いカットイン、服部のロングなどがテンポよく決まり、さらには GK 高橋の 7mT 阻止などで、後半８分にはリードを４点に広げる。リードをさらに広げたいところであったが、確実に決めておきたいノーマークシュートを連続して外してしまったこと、前半は守れていた相手 BP 陣の強引な突破を止めることができなくなったことが影響し、15 分に 15 対 15 の同点に追いつかれてしまう。その後は一進一退の攻防が続いたが、残り２分で退場の間に連続失点してしまい、19 対 21 で敗戦。

2019/7/18（木）：予選ラウンド　スロベニア　29（16－12、13－10）22

予選ラウンド２戦目の相手は、昨年のヨーロッパ予選を１位で通過したスロベニア。今大会の優勝候補に挑む日本の先発メンバーは、左ウイングから矢野、川崎、末岡、徳田、櫻井、高野、GK 高橋。開始 90 秒に先制点を許すが、５分に高野のポストシュートで１対１に追いつくと、その後は落ち着いたセットオフェンスと素早いバックチェックでスロベニアにくらいつく。とりわけ、開始６分からは、磯田をポストに入れる７人攻撃が機能し、末岡が連続して 7mT を獲得し、自ら得点する。その流れで、開始 20 分までは 10 対 10 の互角の戦いを見せることができていたが、２分間退場している間にスロベニアに連続得点を許し、12 対 16 の４点ビハインドで前半が終了する。

後半に入ると、日本の 6-0DF が機能する。センター DF、ハーフ DF、サイド DF の連動した動きで、相手の BP 陣にプレッシャーを掛けると、GK 中村がビッグセーブを連発、後半残り 10 分までは、19 対 23 と相手のリードを４点に抑える。そこから何とか追いつきたいところであったが、セットオフェンスでのパスミスやシュートミスを連続した間に３連続得点を許し、22 対 29 で敗戦となった。次のチュニジア戦の勝利を全員の力で勝ち取り、クオーターファイナル出場を引き寄せたいところ。

2019/7/19（金）：予選ラウンド　チュニジア　26（14－8、12－17）25　日本

予選ラウンド３戦目の相手はチュニジア。この試合をものにして、クオーターファイナルへの出場権を引き寄せたい日本の先発メンバーは、左ウイングから矢野、川崎、末岡、徳田、櫻井、高野、GK 中村。開始１分、櫻井が行った相手ポストに対するホールディングが退場の判定を受ける。これで勢いづいたチュニジアの攻撃を日本はなかなか止めることができず、６分には０対４とリードされてしまう。７分に末岡の見事なステップシュートでこの試合の初得点を奪うが、その後も 6-0 ディフェンスがなかなか機能しない。さらに、７分、12 分と連続して退場者を出している間に得点を奪うことができず、一時リードを９点に広げられる。その後、矢野や朝野をトップに置く 5-1 ディフェンスがようやく効果を発揮し、後半残り５分は相手に得点を与えず、８対 14 で前半を折り返す。

日本は、試合の流れを引き寄せるために、後半のスタートから浅野をポストに入れて７人攻撃を仕掛ける。また、センターに中村を投入する。それでも、なかなか点差は縮まらず、13 分まで 14 対 22 の８点ビハインドのまま。しかし、大杉が積極的なディフェンスを仕掛け、５分間相手に得点を許さず、４連続得点して 18 対 22 とする。その後、末岡の連続得点などでジリジリと点差を詰め、残り１分にはついに 25 対 25 の同点に追いつく。このまま逆転し、勝利したいところであったが、残り７秒で相手に得点を許してしまい 25 対 26 で敗戦。次のスペイン戦で日本代表としての意地をみせたいところ。

2019/7/21（日）：予選ラウンド　スペイン　28（13－11、15－11）22　日本

予選ラウンド４戦目の相手は今大会の開催国スペイン。相手のホームで意地を見せたい日本の先発メンバーは、左ウイングから矢野、川崎、中村、徳田、櫻井、高野、GK 中村。日本の７人攻撃を警戒したスペインは、トップを高くあげるディフェンスではなく、6-0 ディフェンスから試合に入る。それに対して日本は、開始３分に素早いパス展開から川崎のカットインで１

戦　評

点目を奪う。その後も徳田のロング、櫻井のサイドなど多彩な攻撃をみせる。DF では、高野と大杉が DF ラインをコントロールし、コート中央や 45 度付近で何度もフリースローを獲得する。その結果、スペインのシュートを 20 本に抑えることに成功し、11 対 13 のスペイン 2 点リードで前半を折り返す。

後半のスタートから、日本はスペインと一進一退の攻防を繰り広げる。DF では、朝野が相手エース・スアレスの 1 対 1 を何度も止め、GK 高橋もビッグセーブを連発。それに負けじと、OF 陣も奮闘する。7 人攻撃で確実に広いスペースを作り、末岡のカットイン、櫻井のサイドなどで確実に得点を重ねていく。残り 9 分の時点まで 20 対 21 と互角の戦いを見せることができたが、その後、3 連続失点を含む 7 失点により、22 対 28 で敗戦となった。次のアメリカ戦で今大会の初勝利をねらう。

2019/7/22（月）：予選ラウンド　日本　21（5 − 11、16 − 9）20　アメリカ

予選ラウンド最終戦の相手はアメリカ。この試合に勝利し、予選ラウンドの 5 位同士が戦うプレジデントカップへの出場権をなんとしてでも得たい日本の先発メンバーは、左ウイングから矢野、川崎、中村、徳田、櫻井、大杉、GK 中村。日本は前半、相手 GK の壁を崩すことがなかなかできない。ノーマークのチャンスは作ることができるものの、肝心のシュートを決めることができない時間が続く。さらに、ここまでの 4 試合で対戦チームを苦しめてきた積極的な DF が陰をひそめ、アメリカにペースを握られてしまう。その結果、5 対 11 のアメリカ 6 点リードで前半を折り返す。

後半のスタートから、日本はいつもの積極的な DF を展開、開始 6 分間相手に得点を許さないでいる間に、川崎、矢野が速攻のノーマークシュートをしっかり決めるなど 10 対 11 と追い上げる。そして、11 分に徳田のミドルで 13 対 13 の同点に追いつくと、18 分には藤田のサイドで 17 対 14 とし、この試合初めてアメリカに 3 点差をつける。その後 7 分間は、お互いに点を取り合い、残り 5 分の時点で 21 対 17 と日本のリードはこの日最大の 4 点となる。そのまま逃げ切りたかったが、残り 3 分の間に 3 連続得点を許してしまい、21 対 20 で辛勝。プレジデントカップに向けて、課題の残る試合となった。

2019/7/24（水）：プレジデントカップ　日本　26（14 − 6、12 − 10）16　ナイジェリア

プレジデントカップ初戦の相手はナイジェリア。この大会において 1 つでも多くの勝利と自信を手にしたい日本の先発メンバーは、左ウイングから矢野、川崎、末岡、徳田、櫻井、高野、GK 中村。日本は開始 1 分、矢野のサイドでこの試合初得点を挙げると、2 分に川崎のロング、5 分には末岡の速攻など、ナイジェリアに猛攻を仕掛ける。守りにおいても、持ち前の積極的な DF が機能し、開始 8 分まで相手にゴールを許さない。非常に順調な滑り出しを見せた日本は、20 分までペースを保ち続け、12 対 2 と 10 点のリードを奪う。27 分には退場者を出してしまうが、慌てることなく試合を進めた日本は 14 対 6 の 8 点リードで前半を折り返す。

日本は、後半もスタートダッシュに成功する。開始 2 分までに矢野、櫻井、服部で 3 連続得点を挙げて 17 対 6 として、この試合の最大リードを 11 点とする。後半 11 分には、末岡が獲得した 7mT のチャンスを露木がしっかりと決めて、ムードは最高潮に達する。さらに、露木は後半 29 分にもロングで得点を挙げた。この試合では、相手に許した連続得点は「2」が最高であり、DF で常にペースを握ったまま試合を進めた日本が 26 対 16 で快勝した。

2019/7/25（木）：プレジデントカップ　バーレーン　23（12 − 12、11 − 10）22　日本

今大会最後の対戦相手はバーレーン。この試合に勝利して、プレジデントカップを手にしたい日本の先発メンバーは、左ウイングから矢野、服部、末岡、徳田、櫻井、大杉、GK 中村。日本は開始 30 秒、末岡のカットインシュートでこの試合の初得点を挙げる。落ち着いた立ち上がりを見せた日本であったが、バーレーンもそれに負けない試合運びを見せ、開始 10 分で 5 対 5 とどちらも抜け出せない状況が続く。開始 16 分、退場者を出した場面でも、日本は 6 人攻撃などを用いて慌てることなく試合を進め、バーレーンにリードを許さない。25 分からは、それまで得点のなかった徳田が 3 本のシュートを決め、12 対 12 の同点で前半を折り返す。

後半に入ってからも、両チーム一進一退の攻防が続く。この試合での最大の点差が 2 点であったことがそれを物語っている。互いに譲らず試合は進み、残り 40 秒、川崎のロングシュートで 22 対 22 の同点に追いついた日本は、必死の DF を展開する。しかし、バーレーンのエース、アリにミドルを決められてしまい、22 対 23 とされると追いつくことなく試合終了。昨年のアジア選手権では僅差で勝利していた相手であっただけに、悔しい敗戦となった。

第15回女子ジュニアアジア選手権

開催期間：2019 年 7 月 20 日～ 7 月 29 日
開 催 地：レバノン・ベイルート

メンバーリスト

役職	氏名	ふりがな	所属	
団長	田口　隆	たぐちたかし	公益財団法人日本ハンドボール協会	
監督	新井翔太	あらいしょうた	公益財団法人日本ハンドボール協会	HC 名古屋
コーチ	原田　恵	はらだめぐみ	公益財団法人日本ハンドボール協会	大同大学大同高等学校
コーチ	永野翔大	ながのしょうた	公益財団法人日本ハンドボール協会	東海学園大学
トレーナー	石丸裕美	いしまるひろみ	公益財団法人日本ハンドボール協会	（株）ティーファンクション
ドクター	清水隆昌	しみずたかまさ	公益財団法人日本ハンドボール協会	奈良県立医科大学
分析	五次ほのか	ごじほのか	公益財団法人日本ハンドボール協会	日本体育大学

通し番号	氏名	ふりがな	所属	生年月日	身長	出身校
1	榊　真菜	さかきまな	東京女子体育大学	2000.01.19	173	川崎市立高津高等学校
2	田渕美沙	たぶちみさ	イズミメイプルレッズ	2000.01.30	161	華陵高等学校
3	上田遥歌	うえだはるか	東海大学	2000.02.14	168	大同大学大同高等学校
4	阿部美幸	あべみゆき	早稲田大学	2000.03.10	168	佼成学園女子高等学校
5	谷藤　悠	たにふじはるか	国士舘大学	2000.04.05	163	不来方高等学校
6	石亀萌夏	いしかめもえか	桐蔭横浜大学	2000.04.11	169	不来方高等学校
7	服部沙也加	はっとりさやか	中京大学	2000.05.01	168	三重県立四日市 商業高等学校
8	弓削春風	ゆげはるか	大阪体育大学	2000.05.18	157	明 光 学 園 高 等 学 校
9	岡田彩愛	おかだあやめ	大阪体育大学	2000.05.24	167	高水高等学校
10	大山めい	おおやまめい	東海大学	2000.06.17	170	水海道第二高等学校
11	平野宗香	ひらのしゅうか	筑波大学	2000.06.28	166	山梨県立日川高等学校
12	守屋　葵	もりやあおい	日本体育大学	2000.07.03	167	川崎市立高津高等学校
13	安田つぐみ	やすだつぐみ	桐蔭横浜大学	2000.09.27	164	群馬県立富岡高等学校
14	瀧川璃紗	たきがわりさ	筑波大学	2000.09.29	166	佼成学園女子高等学校
15	宇治村　唯	うじむらゆい	国士舘大学	2001.03.20	161	今治東中等教育学校
16	上嶋亜樹	うえしまあき	小松市立高等学校	2001.07.05	174	小松市立芦城中学校
17	橋口和佳奈	はしぐちわかな	佼成学園女子高等学校	2001.08.06	180	宇城市立松橋中学校
18	竹内琉奈	たけうちるうな	福井商業高等学校	2002.01.11	173	福 井 市 明 倫 中 学 校

第15回女子ジュニアアジア選手権を終えて

団長　田口　隆

この大会は 2020 年にルーマニアで開催される第 22回女子ジュニア世界選手権の出場権が上位４カ国に与えられるというアジア予選を兼ねた大会でした。

日本は予選ラウンドで、ウズベキスタン・インド・レバノンと同組で３試合を行いました。総合力で頭一つ抜きん出ており、３戦全勝でグループＢを１位で通過し、世界選手権の出場権を獲得するとともに準決勝進出を果たしました。世界選手権の出場権獲得がかかる２位争いが熾烈な戦いとなり、ウズベキスタンとレバノンが両チーム間の対戦で引き分けたため、得失点差で順位が決まる状況となりました。結果、レバノンが＋２として、－６のウズベキスタンを上回り、初の世界選手権の出場を決めました。アジアの４強ということでは、韓国・日本・中国・カザフスタンであったのですが、新しい勢力としてレバノンが名乗りをあげました。準決勝は、日本 vs 中国、韓国 vs レバノンの対戦となりました。それぞれ、日本と韓国が順当に勝利して決勝で対戦することとなりましたが、レバノンの台頭は前述の通りですが、中国も体格あり、スピードあり、バランスの良い将来性豊かな選手を揃えていました。順調に成長するとフル代表では脅威となる可能性を感じました。決勝戦は、日本が先制する形でスタートし、闘志の感じられるディフェンスで、韓国にプレッシャーをかけられましたが、シュートの精度など、オフェンス面で個人技が劣っていることは否めず、前半中盤以降はリードを許し、追いかける展開となりました。結果、韓国に敗れて準優勝となりました。

さて、私からは団長という立場で大会の様子を報告させていただきたいと思います。チームが滞在したホテルは、ベイルート郊外にある４つ星クラスにランクされていると言われているところでした。水回りも清潔であり、食事も食べ慣れているものではなかったものの、バランスの良いものが提供されました。チームでミーティングが出来る部屋も準備されており、試合に向けての準備に必要な環境が整っていました。また、新井監督と IHF ナショナルコーチコースを一緒に受講したレバノン人指導者（男子 U21 監督）による、TV 中継された映像提供など様々なサポートにも助けられ、国際的なネットワークによる優位性も改めて感じることにもなりました。ホテルから試合会場及び練習会場へは、マイクロバスでの送迎サービスがあり、車内は狭いと感じたことは否めませんでしたが、時間には正確で移動に関するストレスを感じることはなかったように思います。試合会場及び練習会場は、中東の国とは思えないぐらい空調が効いておらず（過去の中東での大会では効き過ぎ？というぐらい室温が下げられていた。）、選手及びスタッフは少々暑く感じていたのではないかと思います。大会が始まってから、休息日が変更になったり、レバノンの準決勝進出もあり、TV 放映の関係で急遽、日本 vs 中国の準決勝の時間が変更になったりすることがありましたが、日本チームは落ち着いてそれらに対応し、上手く時間を調整するとともに、自分たちのやるべき事に集中しました。

来年の女子ジュニア世界選手権に向けて、今大会で得た貴重な経験を大切にして、課題克服に積極的に取り組んでいかなくてはならいことは当然のことながら、ポスト東京 2020 の〝おりひめジャパン〟強化へも繋げなくてはならないと、改めて強く感じました。最後に、第 15 回女子ジュニアアジア選手権出場に際し、スタッフ及び選手派遣にご理解・ご協力を賜りました関係各位に、またご支援賜りました全ての方々に心より御礼申し上げ、大会報告とさせていただきます。

第15回女子ジュニアアジア選手権大会報告

監督　新井 翔太

今回、女子日本代表 U-20 が第 15 回女子ジュニアアジア選手権で戦うに際しまして、日本ハンドボール協会、各選手所属チーム関係者の皆様、及び各方面から様々なご支援をいただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

我々は、来年ルーマニアで開催される第 22 回女子ジュニア世界選手権の出場権獲得とアジアでの優勝を目指し、下記三回の強化合宿を経てアジア選手権に臨みました。

◆第一回強化合宿

5 月 25 日～ 28 日の 4 日間 ANTC で強化合宿を行いました。本合宿では、チームとして大切にする「コミュニケーション」「激しさ」をミーティングや練習の中で確認しました。戦術的には、映像を用いて DF システムの理解を深めるとともに、システムを機能させる上で重要となる、「利き手へのハードコンタクト」や「牽制」のトレーニングを重点的に行いました。女子大学生のご協力をいただき、実践トレーニングの中でも上記 2 点を確認できたことはシステム定着を促進する良い機会となりました。

また、栄養講習会を開催し、将来を見越した体づくりへの取り組みを行いました。

◆第二回強化合宿

6 月 23 日～ 27 日の 5 日間 ANTC で強化合宿を行いました。本合宿では、システムチェンジを多用し、ポストを中心に数的有利を作り出す OF トレーニングを重点的に行いました。また、スピード、強さ、シュート力が格上の男子高校生、男子大学生のご協力をいただき、アジア強豪国を想定した実践トレーニングを行うことができました。個々が高強度の出力を出す中で戦術を遂行する「適応」の機会となりました。

本合宿でも栄養講習会を開催し、体づくりへの意識並びに知識向上を図りました。

◆第三回強化合宿

7 月 14 日～ 16 日の 3 日間名古屋市ブラザー体育館で強化合宿を行いました。本合宿では、出発直前合宿として日本リーグ女子チームのご協力をいただき、実践トレーニングの中で各局面戦術確認を行いました。

◆本大会

7 月 17 日昼頃現地に到着し、3 日間の時差調整とトレーニングを行い、7 月 20 日の大会初戦に臨みました。本大会では、試合日も試合がない日も各国に毎日 1 時間の練習時間が割り当てられておりました。限られた時間でチームとしてレベルアップしていく必要がある我々にとってこの時間は非常に貴重な時間であり、大会期間中も継続してレベルアップを図るためのトレーニングを行いました。

予選ラウンドでは、ウズベキスタン、インド、レバノンとの対戦でしたが、選手全員の総力で勝ち上がり、準決勝進出を決めました。

準決勝は中国との対戦となりました。中国は 175cm 以上の選手が何名か、また男子並みの身体能力をもった選手もおり、クロスゲームが予想されました。実際の試合では、予選ラウンドで課題となった前半序盤を高い集中力でプレーすることができ、試合を優位に進めることができました。また、試合が進む中で相手選手の特徴に適応し、的を絞った DF をすることができ、26 対 21 で勝利することができました。一方で、課題も多く見られました。特にミス数 20 という数字は、決勝戦において改善必須な課題となりました。

決勝は韓国との対戦となりました。韓国はユース世界選手権で 3 位入賞しているチームであり、個々の能力が非常に高いチームでした。実際の試合では、DF で粘る時間帯もありましたが、押し込まれて失点することが多く、OF で停滞する時間も長くなってしまい、19 対 26 で敗戦となりました。この試合から多くの重要課題が抽出されました。中国戦で課題となったミス数に関しては、攻撃回数 66 回（中国戦）→攻撃回数 56 回（韓国戦）と攻撃回数を減らすことでミス数 11 と減らすことはできましたが、さらに減らすことが求められます。また、サイドシュートに関して、日本 9 本中 4 点（44%）、韓国 15 本中 10 点（67%）とシューター、GK ともにこの差を埋める必要があります。中でも、一番重要だと感じたのは、瞬間的に生じる数的有利をハイプレッシャー下においても精度高く攻めきることです。

今大会、優勝を逃してしまいましたが、チームは試合毎に成長していきました。選手達は試合毎に異なるオーダー、また試合中のオーダーによく応えてくれました。世界選手権の切符を得ることはできたので、アジア諸国よりもさらに体格差の大きい欧州諸国に勝つために、フィジカル面での強化を継続的に行い、さらに上記課題をクリアしていき、世界選手権へ最善の準備をしていく所存です。

改めまして、日本ハンドボール協会、各選手所属チーム関係者の皆様、及び各方面から様々なご支援をいただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

キャプテン　上田 遥歌

7 月 20 日から 7 月 29 日にかけてレバノンで行われました U-20 アジア選手権において、多大なるご支援とご声援を頂きありがとうございました。参加国は地元レバノンをはじめ、韓国・中国・カザフスタン・香港・ウズベキスタン・インドの 8 カ国でした。

チームは世界選手権の切符を手に入れることを第一目標に、そして韓国に勝つことを目標に大会に挑みました。今大会は例年と違い、2 つのリーグに分かれて試合をし、各リーグ上位 2 チームが決勝トーナメントに進出できるという形でした。私たち日本は、決勝トーナメントに進出し、そこで中国に勝たなければ韓国と戦う権利を得ることができませんでした。

今大会ではチームが結成してからアジア選手権に挑むまでの日数が少なく、不安材料が多くありました。その分チームは沢山のミーティングを行い、監督や選手同士のコミュニケーションを積極的に取りました。また、スタッフの方から日本代表としてのあり方や責任などのお話をして頂き、このチームがどうあるべきなのか、どうありたいかなどプレーだけでなくチームとして考え、短い期間の中でもチームがまとまっていったと思います。

宿敵韓国との最終戦では、19 対 26 で負けました。この韓国戦は課題が沢山残る試合となりました。韓国の個々の強いプレーを一人一人が守ることが出来ず、失点を喫する場面が多かったです。今後の課題として、技術面はもちろんのこと、個人がハードコンタクトを 1 試合通してできるなど、フィジカル面でのレベルアップが必要だと強く感じました。

来年のルーマニアで開催される世界選手権ではアジア選手権で出た課題を無駄にすることなく、所属チームで個々のレベルアップを図り挑みたいと思います。

今大会も沢山の方に支えて頂き、素晴らしい環境の中プレーする事が出来ました。また、沢山の貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。来年の世界選手権も精一杯頑張りますので応援宜しくお願いします。

トレーナー　佐野 裕美

今回レバノンのベイルートで開催された第 15 回女子ジュニアアジア選手権に帯同させていただきました。貴重な経験をさせていただき、関係者の皆様に深くお礼申し上げます。ありがとうございます。

チームの立ち上げ時から自立・自律した選手教育をテーマに掲げ、選手サポートを行いながら、自分で自分の体を把握できるように教育してきました。時差対策に始まり、毎朝のセルフコンディショニングチェック、セルフケア、セルフウォーミングアップなど教育を進める中で、日に日に選手の意識が高まり、成長していく過程を見ることができ良かったと思います。

宿泊ホテルの環境は非常に良く、食事もバランスよく、品数もあり、大きな問題はなかったように思います。生野菜やカットフルーツに関しては数日間はスタッフのみの摂取とし、その間選手は温野菜やフルーツを丸ごと出していただくように依頼することで対応しました。試合前の食事や試合時間が遅い時の補食などは持参した白米を使用し、おにぎりを作るなどしてエネルギーをしっかり摂れるようにし、また偏食しがちな選手は持参した日本食で補うようにしてもらいました。

大会中の体力面、筋力面の維持はホテルから外に自由に出られる環境ではなかった為、ホテル内の小さなジムで各自必要なトレーニングの実施、コーチによるフィジカル的なトレーニングの実施で補いましたが、もう一工夫必要であったと感じています。

期間中を通して、清水ドクターと共に診察、治療をこまめに行っていくこと、また選手各自が自分の体としっかり向き合うことで、体調不良者や外傷者が出たものの大きな事態に繋がることなく、最後まで全員で戦い抜くことが出来ました。

来年のジュニア世界選手権に向けて体づくり、食育の面で課題が山積みですが、選手個々が反省し、来年を見据えて動き出していますので、それに期待していきたいと思います。

戦評 7月20日（土） 日本　38（18－11、20－13）24　ウズベキスタン

日本の初戦の相手はウズベキスタン。開始からアグレッシブな6-0DFを敷く日本に対して、ウズベキスタンは体格を生かした力強いプレーで日本DFを崩し、先制点を決める。しかし、日本も相手のミスからの速攻で田渕がミドルシュートをねじ込みすぐさま同点に追いつく。その後もシュートチャンスは掴むものの、初戦の緊張感からか中々得点できない時間が続く。前半15分を過ぎたあたりから、DFに安定感が見られるようになる。勝負所での相手シュートもGK榊がしっかりとセーブし、速攻からの連続得点を挙げ、18対11の7点リードで前半を折り返す。

後半開始1分、上田のスピードあるカットインプレーが相手チームの退場を誘う。退場に伴い獲得した7mTを阿部が確実に決め、その後も橋口のポストシュート、平野のカットインプレーなどで着実にリードを広げていく。しかし、ウズベキスタンもダブルポストやサイドハンドのミドルシュート、利き手側への力強いカットインプレーで巻き返しをはかる。苦しい展開になりかけたところで、再び上田のカットインプレーによって相手チームの退場を誘い、勢いを取り戻した日本。その後も相手のミスをしっかり得点につなげ、10点以上の大量リードを奪い、最終的には38対24で初戦を白星で飾った。

戦評 7月22日（月） 日本　40（18－10、22－9）19　インド

第二戦はインドとの対戦。開始早々、日本はインドの力強い縦の2対2に押し込まれて、7mTを与えてしまう。しかし、これをGK榊のビッグセーブにより立ち上がりのピンチを防ぐことに成功。日本は2枚目を守っている田渕の効果的な牽制プレーによって、相手のオーバーステップを誘発。これを平野が速攻プレーで得点し。先制点を挙げる。勢いに乗りたい日本だったが、初戦同様立ち上がりに固さが見られ、テクニカルミスにより攻撃がうまくいかない。一方、インドはサイドのトランジションプレーやバックプレーヤーによる力強いカットインプレーなどによって得点を重ねていく。日本のDFは相手OFに対応できていない部分もあったが、それ以上に相手のOFミスを誘発し、速攻で大量得点を奪うことに成功、前半を18対10の8点リードで終える。

ハーフタイムでは主にDFの修正点を確認した日本。その結果、後半立ち上がりから相手ミスを誘発させるDFを展開、谷藤、宇治村、平野、弓削らが速攻で大量得点を挙げる。一方セットOFでは、ポストを中央に置いた縦の2対2を軸に、田渕のカットイン、安田のロング、石亀・橋口のポスト、宇治村のサイドなど、バリエーションのある攻撃を展開、相手に攻撃の的を絞らせなかった。後半ラスト10分、日本のセットDFでは疲労もあり、相手のカットインなどを許す場面もあったが、途中出場のGK大山のビックセーブによって相手の攻撃をシャットアウト、最終的に日本は40対19で勝利、開幕2連勝を挙げた。しかし、DFコンタクトやノーマークシュートミスなどの個人的な課題が残った。次戦のレバノン戦でより質の高いプレーができるように最善の準備をしたい。

戦評 7月24日（水） 日本　31（17－10、14－13）23　レバノン

3戦目は開催国レバノンと対戦。レバノンにとっては世界選手権初出場を決定づける重要な一戦ということもあり、今大会1番の観客の中での試合となった。立ち上がりから日本のアグレッシブDFが機能し、1対1の状況で全てフリースローに抑える。相手をパッシブプレー寸前まで追い込みなかなか得点を許さないが、日本のセットOFでは相手の6-0DFに対して、サイド、ロングなどのチャンスは作れるもののシュートが中々決まらない。日本の出足の隙をつくかのように左バック・アンドレに連打を許してしまい、いきなり0対2と悪い雰囲気が流れ始める。しかし、相手ミスからの速攻という日本の得意な展開に持ち込むことができ始めると、10分には6対3とリードを奪う。日本国内では経験することのできない中東特有の力強い1対1に苦しみながらも、DFからの速攻でさらにリードを広げ、前半を17対10で折り返す。

ハーフタイムでは、DFで1対1を負けた際のフォローDFのハードコンタクトについて確認した。しかし、後半立ち上がりから相手のサイドやセンターの1対1を守りきれず、立て続けに2度の7mTと退場を与えてしまい、3連続失点。日本も今大会初出場のセンター・岡田によるカットインプレーによって相手選手の退場を誘う。安田の7mTや平野のサイドで2点を返すが、ボナーとセンター・マルコビッチの1対1を止められず、再び退場を重ねてしまい、後半18分には23対21と2点差にまで詰め寄られる。ここでタイムアウトをとり、DFと速攻について再度確認した日本。その後、瀧川、竹内、谷藤などの速攻により6連続得点を重ね、最終的には31対23で勝利を収めた。

【Group B】

順位		JPN	LIB	UZB	IND	数	勝	分	敗	総得点	総失点	得失点差	勝点
1.	日本 (JPN)		31○23	38○24	40○19	3	3	0	0	109	66	43	6
2.	レバノン (LIB)	23●31		25△25	37○27	3	1	1	1	85	83	2	3
3.	ウズベキスタン (UZB)	24●38	25△25		38○30	3	1	1	1	87	93	-6	3
4.	インド (IND)	19●40	27●37	30●38		3	0	0	3	76	115	-39	0

戦評 7月27日（土） 日本　26（14－10、12－11）21　中国

グループリーグを1位通過した日本の準決勝の相手は、前回大会で苦杯をなめた中国。日本は、阿部、平野、上田、竹内、谷藤、岡田、GK榊というスターティングメンバー。竹内の速攻で試合がスタートする。立ち上がりのDFは、サイドやミドルを打たれるがGK榊がシャットアウト、OFではバックとポストの縦の2対2を軸としたセット攻撃で、岡田のカットイン、上田のポスト、平野のサイドなどで得点を重ね、開始18分で11対4と7点のリードを奪う。しかし、中国も左バックのエース・ZHOUのミドルやセンターZHUのカットインなどで反撃、前半を14対10で終える。

後半も、前半同様日本のDFが機能し、得意な速攻に持ち込むが、オーバーステップやキャッチミスなどで得点に結びつけることができない。セットOFでもシュートまではいくものの、相手GK・SONGのナイスセーブに阻まれる。一方、中国は日本のミスを速攻につなげて確実に得点を重ね、後半12分には15対16と1点差にまで迫る。ここでたまらずタイムアウトを取り、攻撃のきっかけを確認した日本。タイムアウト明けに阿部のミドル、谷藤のカットイン、岡田の7mTなどで攻撃のリズムを取り戻し、中国を引き離すことに成功する。43%という高セーブ率をマークし、安定したキーピングを披露したGK榊を軸に、最後までDFの固さを見せた日本が26対21で勝利、決勝の舞台へと駒を進めた。

戦評 7月29日（月） 韓国　26（16－11、10－8）19　日本

アジアジュニア選手権最終戦は、韓国との対戦。開始早々、竹内のサイドと相手ミスからの速攻で連続得点。対する韓国も右バック・Jeongのアウトカットイン、右サイド・Kimのサイドにより2得点し、拮抗した立ち上がりとなった。しかし、日本は韓国の2枚目が高めの6-0DFにパスリズムを狂わされ、うまく攻めることができず、ミスからの失点を重ねてしまう。前半12分、4対7と韓国に3点リードされたところで日本はタイムアウトを取り、攻撃のきっかけを確認。タイムアウト明けに、右バック・安田のロングが連続で決まり、勢いに乗るかに見えた。しかし、韓国のバックプレーヤー陣のロングとポストシュートを止めることができずに、前半を11対16の5点ビハインドで折り返す。

後半の日本は、立ち上がりからミスが目立ち、最初の10分間は沈黙、得点を挙げることができない。この間に韓国は、右サイド・Kim、センター・Sonらの活躍により3連続得点し、11対19とリードを広げる。ここで再びタイムアウトをとった日本は、7人攻撃を仕掛ける。安田、岡田、平野、谷藤などの活躍でお互いに点を取り合う展開が続くが、前半の得点差を埋めることができずに19対26で敗れ、今大会を2位で終えた。

最終順位　優勝：韓国　2位：日本　3位：中国　4位：レバノン
5位：チャイニーズタイペイ　6位：カザフスタン　7位：ウズベキスタン　8位：インド

女子ジュニアアジア選手権　過去の結果

回	会期	会場	備考	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
1	1990	中国・合肥	5か国	韓国	チャイニーズタイペイ	中国	日本	インド			
2	1992	中国・北京	5か国	韓国	北朝鮮	中国	日本	チャイニーズタイペイ			
3	1995	韓国・ソウル	4か国	韓国	中国	日本	チャイニーズタイペイ				
4	1996	中国・成都	3か国	韓国	中国	日本					
5	1998	日本・大阪	5か国	韓国	中国	カザフスタン	日本	チャイニーズタイペイ			
6	2000	バングラディッシュ・ダッカ	7か国	韓国	チャイニーズタイペイ	日本	中国	インド	バングラデシュ	ネパール	
7	2002	ヨルダン・アンマン	5か国	韓国	中国	日本	チャイニーズタイペイ	ヨルダン			
8	2004	タイ・バンコク	6か国	韓国	日本	中国	チャイニーズタイペイ	タイ	カザフスタン		
9	2007	カザフスタン・アルマトイ	7か国	韓国	カザフスタン	チャイニーズタイペイ	日本	中国	カタール	イラン	
10	2009	タイ・バンコク	5か国	韓国	日本	中国	タイ	香港			
11	2011	カザフスタン・アルマトイ	8か国	韓国	中国	カザフスタン	日本	チャイニーズタイペイ	イラン	ウズベキスタン	香港
12	2013	カザフスタン・アルマトイ	5か国	韓国	日本	中国	カザフスタン	ウズベキスタン			
13	2015	カザフスタン・アルマトイ	6か国	韓国	日本	カザフスタン	中国	ウズベキスタン	イラン		
14	2017	中国・香港	7か国	韓国	中国	日本	カザフスタン	ウズベキスタン	香港	インド	
15	2019	レバノン・ベイルート	8か国	韓国	日本	中国	レバノン	チャイニーズタイペイ	カザフスタン	ウズベキスタン	インド

アジアU-22（男子・女子）ハンドボール選手権

開催期間：2019 年 7 月 14 日～ 7 月 21 日
開 催 地：香港
会　　場：九龍公園体育館
(Kowloon Park Sports Centre)

男女とも優勝！

メンバーリスト

団長	松　喜美夫	マツ　キミオ	1950.02.13	全日本学生ハンドボール連盟

男子

役職	氏名	フリガナ	生年月日	所属
監督	實方　智	ジツカタ　サトシ	1961.10.30	中央大学（監督）
コーチ	加藤　良典	カトウ　ヨシノリ	1988.06.30	明治大学（監督）
ﾄﾚｰﾅｰ	村田　恭平	ムラタ　キョウヘイ	2000.01.24	早稲田大学（2 年）

背番号	氏名	フリガナ	生年月日	ポジション	所属大学	学年	利腕	伸長
1	羽諸　大雅	ハモロ　タイガ	1998.02.17	GK	早稲田大学	4	右	182
2	伊藤　聖哉	イトウ　セイヤ	1997.10.04	CP	筑波大学	4	右	176
3	山口　勇樹	ヤマグチ　ユウキ	1997.05.17	CP	筑波大学	4	右	192
4	中川　翔太	ナカガワ　ショウタ	1997.08.23	CP	明治大学	4	左	184
5	山田　信也	ヤマダ　シンヤ	1997.04.25	CP	明治大学	4	右	190
6	保利　憲之朗	ホリ　ケンシロウ	1997.09.08	CP	中央大学	4	右	185
7	川上　勝太	カワカミ　ショウタ	1997.11.22	CP	日本体育大学	4	右	180
8	中元　来	ナカモト　ライ	1997.09.03	CP	日本体育大学	4	右	173
9	阿部　奎太	アベ　ケイタ	1998.02.04	CP	国士館大学	4	右	187
10	松岡　寛尚	マツオカ　ヒロキ	1997.07.24	CP	法政大学	4	右	173
11	山本　晃大	ヤマモト　コウダイ	1997.07.26	CP	法政大学	4	右	178
12	高光　凌	タカミツ　リョウ	1998.03.31	GK	国士館大学	4	右	187
13	安永　翔	ヤスナガ　カケル	1998.06.07	CP	中央大学	3	右	176
14	土屋　健介	ツチヤ　ケンスケ	1999.02.16	CP	札幌大学	3	右	178
15	高橋　翼	タカハシ　ツバサ	2000.03.09	CP	東海大学	2	右	181
16	河原　脩斗	カワハラ　シュウト	1999.06.01	CP	日本体育大学	2	左	176

女子

役職	氏名	フリガナ	生年月日	所属
監督	楠本　繁生	クスモト　シゲオ	1964.10.10	大阪体育大学（監督）
コーチ	佐藤　晃	サトウ　アキラ	1971.03.02	立命館大学（監督）
コーチ	山崎　英幸	ヤマサキ　ヒデユキ	1965.11.22	関西福祉科学大学（監督）
ﾄﾚｰﾅｰ	井口　祥平	イグチ　ショウヘイ	1982.10.21	履正社医療スポーツ専門学校

背番号	氏名	フリガナ	生年月日	ポジション	所属大学	学年	利腕	伸長
1	榎　和奏	エノキ　ワカナ	1998.01.08	GK	大阪体育大学	4	右	165
2	松倉　みのり	マツクラ　ミノリ	1997.09.14	CP	大阪体育大学	4	左	154
3	切通　夢	キリトオシ　ユメ	1998.01.13	CP	天理大学	4	左	157
4	前田　みのり	マエダ　ミノリ	1997.07.19	CP	大阪教育大学	4	右	168
5	秋山　静香	アキヤマ　シズカ	1997.12.05	CP	大阪体育大学	4	右	174
6	吉岡　紗耶	ヨシオカ　サヤ	1998.02.04	CP	大阪体育大学	4	右	160
7	安達　晴香	アダチ　ハルカ	1998.03.22	CP	関西福祉科学大学	4	右	160
8	川上　真愛	カワカミ　アイ	1999.02.14	CP	大阪体育大学	3	左	156
9	相澤　菜月	アイザワ　ナツキ	1999.01.06	CP	大阪体育大学	3	右	159
10	吉留　有紀	ヨシドメ　ユキ	1998.08.02	CP	大阪体育大学	3	右	164
11	南　夏津美	ミナミ　ナツミ	1998.06.11	CP	大阪体育大学	3	右	167
12	舟久保　朱音	フナクボ　アカネ	1999.05.12	GK	武庫川女子大学	2	右	177
13	中山　佳穂	ナカヤマ　カホ	1998.10.23	CP	大阪体育大学	3	左	173
14	岸本　晴日	キシモト　ハルカ	1999.06.01	CP	関西福祉科学大学	2	右	165
15	辻野　桃佳	ツジノ　モモカ	2000.02.16	CP	大阪体育大学	2	右	172
16	尾辻　素乃子	オツジ　ソノコ	1999.07.09	CP	大阪体育大学	2	右	170

アジア U-22 選手権大会に参加して（総括）

団長　松　喜美夫

はじめに

今回の U-22 アジア選手権に参加のご支援を頂いた日本ハンドボール協会、全日本学生ハンドボール連盟、北海道学生ハンドボール連盟、関東学生ハンドボール連盟、関西学生ハンドボール連盟、渡作株式会社（インパル）様、株式会社アクトラス様に感謝を申し上げます。さらに、ボール等の用具の提供を頂いた株式会社モルテン様、トレーニング会場とトレーニングを一緒にお手伝い頂いた明治大学ハンドボール部の皆さま、中央大学ハンドボール部の皆さま、大阪体育大学ハンドボール部の皆さまには厚く御礼申し上げます。

2019 年度　U-22 男女日本代表チーム

今回の U-22 男女日本代表チームは、おおよそ大会開催の 1 ヶ月前に編成されたことから、非常に準備期間の短い中でチーム作りをしなければいけないという難しいものでありました。私達が大会参加までに行うことのできたトレーニング回数はわずか 5・6 回であります。この少ない回数のトレーニングで、今大会における守備や攻撃での個々の考えをはっきりと伝え、選手間やコーチ間および選手とコーチの間で多くのコミュニケーションを行うことを重視しました。ただ、やはり準備期間は非常に短く、多くのやり残したことを持ったまま大会開催地である香港へ出発することとなりました。特に、選手らに、日本代表チームの意味や責任についての理解を求めましたが、これらの理解が十分ではない状態で、現地入りしました。この原因としては、チームの編成が大会直前であったこと、チームでのトレーニングがわずか５・６回しか持てなかったことが関係していると考えています。この問題に関しては、日本ハンドボール協会がしっかりとリーダーシップをとり、チーム作りのために必要な時間を鑑みて、適切な時期にチーム編成を行い、監督・コーチや選手に十分なトレーニング時間を与えるような準備をして頂くことを希望致します。十分なトレーニング時間を確保することにより、選手と監督・コーチが共に時間を過ごすことができ、これらの時間がチームの強化のみならず、日本ハンドボールの強化の責任や日本代表チームの重み、国際大会に出場する意味を理解させることにつながります。そして、これらのことが、若い選手らにとっては、有意義な国際大会への参加となり、将来のさらなる活躍のための糧になると信じております。

また今回は特に香港の「逃亡犯条例」改正案に対する抗議活動からのデモ活動、アジア大会なのか東アジア大会なのか不安と不満を抱えて、7 月 13 日に男子は羽田国際空港･女子関西国際空港より香港へ出発、大会期間中のスケジュールは、基本的に午前中はトレーニング、午後はゲームというものでありました。7 月 14 日には、午前中でのトレーニングで守備・攻撃での戦術的な確認を行い、午後にオープニングセレモニー。男女とも初戦に勝利したことより、代表チームとして国際大会を経験したことで、今まで促し続けていた日本代表チームの意味や責任についての理解が選手らに芽生え始めたようでありました。試合後には、日本代表チームとして、他国代表チームと戦う喜びや試合の結果に対する責任についての言葉が選手らから語られるようになりました。事実、翌日のトレーニングからは、選手達が前日までのトレーニングと変わって、より自主的に動き始め、自分がチームの為に必要な事は何かを考え行動し始め、選手間および選手とコーチとの間のコミュニケーションも活発になり、求めているレベルに近づき始めました。どのような相手であっても、自分達は日本を代表しているチームだということを忘れずに、60 分間全力を出し続けようということを確認した結果、大会開始からここまででチームは劇的に成長し、大きな成長を実感しました。最初のチーム編成の時から、今大会の最重要な試合は、大会最終日の韓国戦であり、韓国戦にチームのパフォーマンスがピークになるようにチームをコントロールしてきました。その結果、短時間でのチーム作りでしたが、先述したようにチームは著しく成長しました。結果、男女とも韓国に勝利、アベック優勝が出来ました。選手団一同、今大会への参加への意義に感謝を、また、学生は将来も代表チームの選手となって、国際大会を戦いたいという希望を述べておりました。たった 10 日間で、東アジアのみの小さな国際大会ではありましたが、選手らにとっては、大きな意味を持つ大会であったと感じております。

今回のチームの反省と今大会での選手の成長を鑑みて、今後とも U-22 アジア選手権では、U-19 や U-21 の選手の国際大会経験と代表チームの一員である責任感や将来のモチベーションを植え付けるような強化につながる参加となればと考えます。

最後に、本大会の参加前から参加後までの間、様々なサポートをして頂いた日本ハンドボール協会事務局の皆さまに感謝申し上げます。

U-22 男子監督　實方　智

この度の U-22 アジア大会参加につきまして、日本ハンドボール協会、全日本学生ハンドボール連盟、東日本の各ハンドボール連盟にご協力いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

今回の U-22 大会について、監督という立場でのコメントを記載させていただきます。

メンバー編成は、各大学から 4 年生中心に、将来有望な 3 年生・2 年生を数人入れました。各大学の監督も快く送り出していただき、大変助かりました。

メンバー結成から大会までの準備期間が短く、関東学生ハンドボール連盟での他の試合（東西対抗、東京国体成年男子東京予選）もあり、事前練習の計画を立てるのも大変で、結果 4 日間しか練習ができませんでした。多くの大学から選手が集まり一つのチームにまとまること、また練習回数が少ないことを鑑みて、監督としては、攻撃と守備と速攻の簡単なシステムを決めました。優秀な選手が多いとはいえ、各大学の攻撃・守備のシステムは違うので、各選手の持ち味を生かせるシステムを考え、4 回の練習で全員に説明し、繰り返し練習しました。

攻撃では、センタープレーヤーのキャプテン山本がゲームメイクし、DF を広げて広い 1 対 1 を勝負することを徹底。またウィングのポゼッションからの攻撃等、いくつかのきっかけからの攻撃も練習。また、韓国が 3：2：1DF でくる可能性もあるため、それに対応する攻撃システムも決めて練習しました。

守備では、6:0DF がメインで 5:1DF にも取り組みました。それぞれの DF 体形でシステムを決めて、守り方を徹底。特に 6：0DF では真ん中 3 枚目を山田と山口が守りますが、練習段階で非常に息が合い、6：0DF で十分戦えることを実感していました。

あとは速攻です。多くの大学から選手が集まると攻撃のリズムが合わなくなる可能性もあり、2 次速攻を積極的に仕掛けて点を取ることを決め選手に説明。2 次速攻では、ウィングの川原の切りを起点にボールをつなぐシステムを決めて練習。選手の理解度も高く、わりとスムーズに構築できました。

最後の 2 日間の練習では、数的不利（5 対 6）、数的有利（6 対 5）、7 人攻撃、についても攻撃システムを決めて練習し、試合を想定した練習も行いました。

あとは本番です。

香港に入った後初戦まで 2 日間空き、この間を心配しましたが、初戦のチャイニーズタイペイ戦はゲーム開始から良い入りができました。前半を、日本 16-8 チャイニーズタイペイで折り返し、最終的には日本 33-21 チャイニーズタイペイと危なげなく勝利することができました。チャイニーズタイペイは弱くなかったですが、日本の 6：0DF が凄く機能してチャイニーズタイペイの得点を最小限にとどめ、守った後の 2 次速攻も積極に行き、総得点の約 40%を 1 次・2 次速攻で得点しました。

初戦を終えて感じたことは、日本の守備力が高いこと、2 次速攻で効果的に得点できるチームであることです。事前に決めたゲーム全体の運び方が間違っていないことを確信できました。

翌日 2 戦目のシンガポール戦。シンガポールはハンドボール発展途上の国で、日本 46-5 シンガポールと大差で勝利。ベンチメンバー全員が試合に出場し得点することができました。

翌日 3 戦目の香港戦。香港もオーバーエイジが 2 名いて弱いチームでなかったですが、日本 32-18 香港で勝利。6:0DF が機能し最小限の得点で守りきり、セット攻撃では手堅く得点し、2 次速攻でも得点する、という日本の勝利の方程式が出来上がってきました。

香港戦後中 2 日空き、最終韓国戦。結果は　日本 24-20 韓国　（前半　日本 10-10 韓国）で勝利し、全勝で優勝することができました。立ち上がりは、日本がノーマークシュートを外して波に乗れないなかで韓国に得点され、追いかける展開。ここでも DF が守ってくれたことにより 10 対 10 という締まった試合となる。

後半に入ると、日本の DF が引き続き機能して、2 次速攻が次々と決まりだし、最大 7 点差まで広げる。最後は日本に退場者が出て 4 点差となったが、後半ベンチでは余裕をもって選手に指示をすることができました。

この大会を振り返って、改めてハンドボールは 1 番に DF が重要であり、次に速攻が重要であると感じました。DF で守って 2 次速攻で点を取る、という至ってシンプルなゲーム運びでしたが、今大会では完全にはまりました。

監督として、選手の良さを引き出すために攻撃・守備・速攻とシンプルなシステムを決めましたが、結果は選手の頑張りがもたらしたものです。今回の U-22 の選手には感謝しかありません。

最後になりますが、U-22 アジア大会は U-19、U-21 等の国際大会に選ばれていた選手はもとより、選ばれなかった選手も参加することができ、大学生にとって有意義な大会であったと思います。

今回も、国際大会初出場の選手が活躍する等、新たな選手の発掘の場にもなると感じました。

U-22 アジア大会参加選手が実業団チームで活躍する、そういう流れを作る大会になることを願っております。

U-22 男子キャプテン　山本 晃大

この度は沢山の応援のおかげで優勝することができました。

U-22 結成当初は各大学の中心選手が集まっていることもあり、キャプテンとしてチーム全員をまとめるのに苦労しましたが、意見の衝突を繰り返しながらも實方監督の指導の下、段々とまとまりのある強いチームに成長することができました。

チームの特徴として、身長が高い選手とスピードのある選手のバランスが良かったため、DF から速攻を強みとしました。

練習期間は長くはなかったのですが、1 つ 1 つのプレーや精度の質を上げていくことで練習期間の少なさを補えたと思います。松団長と實方監督、加藤コーチのチームマネジメントのおかげで、選手も自信を持ってプレーすることができました。

U-22 東アジア選手権では、台湾、シンガポール、香港と快勝することができました。3 試合とも緊張することはなく、自分たちの持ち味を出せた試合でした。最終試合は日本と同じで全勝している韓国との試合でした。韓国に勝てば優勝、というプレッシャーからか、試合の初めは緊張していましたが徐々に日本のペースにすることができ、優勝を勝ち取ることができました。

今大会で感じたことは DF の大切さです。OF がうまくいかなくても、しっかりと守ることができれば試合に勝てるということを学びました。この経験を大切にして、自身の所属している大学でも頑張っていきたいと思います。

応援してくださったハンドボール関係者の皆様、スタッフの方々、選手のみんなに感謝しています。日本代表チームと大学リーグの応援をこれからもよろしくお願い致します。

U-22 日本代表を応援してくださり、ありがとうございました。

U-22 女子コーチ　佐藤　晃

アジア U-22 選手権を終えて

はじめに、アジア U-22 選手権参加にあたり、ご尽力いただきました日本ハンドボール協会、全日本学生連盟、関西学生連盟の皆様に深く感謝申し上げます。また、各学生連盟、特に女子チームの編成にあたりご理解頂いた西日本の東海、中四国、九州学生連盟の皆様、心より御礼申し上げます。

今回のチームは、男子のジュニア世界選手権、女子のジュニアアジア選手権と時期を同じくしたため、男子は東日本、女子が西日本で編成することとなりスタートしました。大阪体育大学の学生を中心に、武庫川女子大学、関西福祉科学大学、大阪教育大学、天理大学から、アンダーカテゴリーの代表経験豊かな選手や初代表の選手を選抜。選手には、大会までの限られた時間の中でどのように取り組めば代表にふさわしいチームになれるかを課し、「チャレンジ」という理念を掲げて大会に臨みました。限られた練習回数はコミュニケーションで補い、経験値の高い選手がリードして、選抜であることのぎこちなさはすぐに消え、香港へ出発する頃には、立派なチームへと成長していました。

大会期間中、チームは一戦ごとに逞しさを増し、チャレンジの理念のもと、代表であることの意識とそれに相応しい取り組みを求めて、厳しさも格段に増しました。選手の怪我もあり、チーム状況が変化する中、特に初代表となる選手の成長が著しく、重ねてきた基本練習はもとより、プレーの選択肢や DF 判断の速さと強さがチーム全体で確実にレベルアップしていました。選手たちもチームの成長を実感していたと思います。

最終戦、韓国はこれまでの試合とは明らかに雰囲気が違いましたが、日本も全く負けていませんでした。前半リードを許したものの慌てる空気はなく、後半実力を存分に発揮し、劇的な逆転をしてみせたのです。振り返れば、楠本監督が掲げた、チャレンジという言葉が選手を繋ぎ、チームが一丸となって良い雰囲気を作り出せたことが、優勝という結果へ導いたのだと思います。

今大会で、男女の選手たちは精神的にも大きな成長を遂げました。現地スタッフにも支えられてプレーに専念できたことを感謝し、代表として活動できたことはとても貴重な経験です。このような機会を、より多くの選手が経験することで、日本の躍進に繋がると確信しました。

改めて、日本ハンドボール協会はじめ、所属のチーム、関係学連の皆様に感謝を申し上げ、優勝の喜びを報告致します。

U-22 女子キャプテン　秋山 静香

はじめに、U-22 女子日本代表チームへのご協力とご声援を頂き、ありがとうございました。

チーム結成当初は、代表チームでの練習期間が短く、不安を抱えたまま大会へ臨みました。残念ながら、現地に到着してからの練習や試合の中で怪我人が出てしまい、出場メンバーが練習時とは異なる状況で試合に挑まなければなりませんでした。ですが、楠本監督のご指導、スタッフの方々のご尽力を頂き、なんとか最後まで全員で戦い抜く事ができました。過半数が同じ大学から選出された選手という事もあり、プレーの共通理解に時間はかかりませんでしたが、国際大会が初めての選手も少なくはなかったため、初戦は緊張や不安から自分達のハンドボールをする事ができませんでした。しかし、試合を重ねるごとに、段々とやるべき事が明確化され、自分達のリズムで試合を運べるようになっていきました。最後の韓国戦では、ステップシュートや逆速攻で失点し、苦しい試合展開が続いたものの、日本も一人ひとりの個人技で確実に点を重ね、最後は 2 点差で勝利する事ができました。また、東アジア選手権大会における、対韓国戦での日本の勝利は未到だった事から、この一戦への選手の想いも強かった事も勝因の 1 つだと思っています。練習期間の短いチームではありましたが、どのような状況でも、前向きに 5 戦をしっかりと戦い抜いてくれたチームメイトには感謝の気持ちでいっぱいです。女子はこの大会では初優勝という事で、選手達の優勝への喜びも大きかったです。

また、このアベック優勝という結果は、沢山の方々の支えとご協力があってこそのものだと思っております。今後は各チームに戻り、この大会で得たものをチームでアウトプットし、全体のレベルアップに繋げていけるよう、一人ひとりが更に精進して参ります。今後とも学生ハンドボールへのご声援とご協力の程宜しくお願い致します。ありがとうございました。

男子戦評

■ 2019/7/16（火）

日本　33（16－8、17－13）21　チャイニーズタイペイ

U-22 チームの初陣は、初戦のシンガポール戦で個人能力の高さとフィジカルの強さで圧倒的な強さをみせたチャイニーズタイペイ。特に左利き３人を擁するセット OF の攻撃は注意しなければならない。試合は日本の DF からスタート。序盤から日本は約束事であるハードコンタクトで相手の攻撃を止め、リズムを作る。そこから河原、中川、山口の速攻で３連取。チャイニーズタイペイはセンター Wu を起点に攻撃を組み立て、前半 10 分６対４とするも、前半途中出場した GK 高光の好セーブから一気に６連続得点。ゲームの流れを一気に日本へ引き寄せる。相手の 6-0DF と 3-2-1DF に対しては、キャプテン山本が冷静に攻撃を組立て得点を挙げていく。日本は安定した DF と河原、中川の活躍で前半 16 対８で折り返す。

後半、日本は 6-0DF から 5-1DF に DF システムを変更。個々の１対１の強さと運動量でチャイニーズタイペイの OF ミスを誘い速攻につなげる。OF では前半見られなかった、相手の裏のスペースを利用した攻撃で得点を積み重ねていく。途中出場した川上、高橋、安永らも攻守に渡り役割を果たし、チームに勢いを与えた。終わってみればベンチメンバー全員が試合に出場し、33 対 21 で初陣を勝利することができた。国際大会を初めて経験する選手が多い中で、選手一人一人が自分の役割を理解し、プレーすることができていた。なお、この試合 10 得点を挙げた河原脩斗がベストプレイヤーに選出された。

■ 2019/7/17（水）

日本　46（22－1、24－4）5　シンガポール

２戦目は、今大会初出場となるシンガポールとの対戦。日本は立ち上り、シュートミス、テクニカルミスが続いたものの、松岡の速攻での得点を皮切りに日本の怒涛の攻撃が始まる。対するシンガポールは、日本の DF を崩すことができず、開始４分から７人攻撃を仕掛ける。日本は慌てることなく対応し、相手のシュートミス・テクニカルミスからの速攻で得点を挙げていく。前半は速攻での大量得点もあり、22 対１のリードで前半を折り返す。

後半、前日のチャイニーズタイペイ戦同様に日本は 6-0DF から 5-1DF に DF システムを変更。後半立ち上り、日本は速攻で連続得点をするものの、相手の長いセット OF にフラストレーションが溜まり、シュートミス、パスミスが目立つ時間帯が続いた。その後、日本はメンバー交替などにより、伊藤と土屋の速攻、中元のサイドシュート、高橋のロングシュートなどで点差を広げていく。攻撃の手を緩めることなく 46 対５で勝利した。なお、Men of the match には、松岡寛尚が選出された。

■ 2019/7/18（木）

日本　32（13－7、19－11）18　香港

３戦目は、地元香港との対戦。香港は立ち上がり７人攻撃を仕掛け、ポストシュートで先制する。日本は、松岡、河原で３連取するが、テクニカルミス、シュートミスが続き、自分達のペースに持ち込むことができない。前半 18 分過ぎ、GK 羽諸の好セーブからの速攻などで６点連取に成功、このリードを保ち、前半を 13 対７で折り返す。

日本は後半、中川と阿部の連続得点で主導権を渡さない。香港は Kwun と Yu が積極的にゴールを狙うが、山田、山口、保利の高さのある日本 DF とハードコンタクトで、シュートチャンスまで持ち込めない。逆に日本は、相手の 5-1DF を力強い１対１とスピードで崩し、点数を挙げていく。後半の中盤には７点連取をして、このゲームの勝利を決定づけた。地元の大声援を受けた香港との対戦で完全アウェーの中、プレッシャーをはねのけ、32 対 18 で勝利した。なお、Men of the match には、山口勇樹が選出された。

■ 2019/7/21（日）

日本　24（10－10、14－10）20　韓国

４戦目は、全勝対決となった韓国との最終戦。前半の立ち上がり、韓国に先制を許したが、日本は松岡の速攻とカットイン、阿部の速攻などですぐに逆転した。韓国は中盤から低めの 3-3DF から 4-2DF に DF システムを変更し、反撃開始。だが、日本は GK 羽諸の好セーブが光り、韓国に流れを渡さない。両者とも譲らず、前半 10 対 10 で折り返す。

後半、日本は退場者を出し、序盤に 11 対 13 とリードを許す。だが、後半から出場した GK 高光が好セーブを連発。守備からリズムをつかみ、伊藤の中央突破による速攻、キャプテン山本のカットイン、中川のミドルシュートで６連続得点を挙げ、16 対 13 と逆転した。一方、韓国は日本の高さと豊富な運動量の DF に苦しみ、流れを引き寄せられなかった。日本はその後も最後まで攻守で気迫あるプレーをみせ、24 対 20 で勝利し、今大会を優勝で終えた。この試合の Men of the match には、高光凌が選出された。また、今大会の優秀選手に羽諸大雅と河原脩斗、MVP には山田信也が選出された。

男子星取表・最終順位

順位		JPN	KOR	HKG	TPE	SIN	数	勝	分	敗	総得点	総失点	得失点差	勝点
1.	日本(JPN)		24○20	32○18	33○21	46○5	4	4	0	0	135	64	71	8
2.	韓国(KOR)	20●24		37○22	35○30	39○15	4	3	0	1	131	91	40	6
3.	香港(HKG)	18●32	22●37		24○23	37○18	4	2	0	2	101	110	-9	4
4.	チャイニーズタイペイ(TPE)	21●33	30●35	23●24		35○8	4	1	0	3	109	100	9	2
5.	シンガポール(SIN)	5●46	15●39	18●37	8●35		4	0	0	4	46	157	-111	0

女子戦評

■ 2019/7/15（月）

日本　38（18－8、20－10）18　タイ

大会初戦、固さが見られる立ち上がりだったが、２分、吉留の速攻を皮切りに４連取、主導権を握る。追いすがるタイもミドルを中心に得点を挙げるが、守りにリズムが出てきた日本は、相手の OF ミスを誘い速攻に繋げて、４連取、３連取と徐々に突き放し、前半を 18 対 8 で折り返す。

後半、南のポストで得点すると、攻守ともに完全にリズムに乗り、吉岡のサイド、相澤のカットインと得点を重ね、優位に試合を運ぶ。途中、相手エースのミドルからの展開に苦しむ場面もあったものの、GK 舟久保の好セーブで流れを渡すことなく、終盤は速攻で圧倒、38 対 18 で白星を手にした。Woman of the match に中山佳穂が選ばれた。

■ 2019/7/16（火）

日本　28（13－10、15－11）21　中国

序盤、相手センターに速攻を許したものの、その後は守り合いとなり、膠着状態が続く。11 分、中山の力強いミドル、吉留、相澤の速攻で４連取するが、直後に相手も４連取、その後も一進一退の攻防が続き、27 分で 10 対 10。ようやく前半終了間際、中山のカットイン、吉留の速攻、相澤のポストで３点差をつけて折り返す。

後半、相澤のカットイン、７mT で５点差に広げるが、中国もサイドシュート、GK のファインセーブで大きく点差は広がらない。中央を高く守られ苦しむ中、川上が要所でサイドシュートを決めると、48 分前田のポストから５連取して 27 対 18 と試合を決定づける。その後はメンバーを入れ替えながら戦い、白星を収めた。Woman of the match に相澤菜月が選ばれた。

■ 2019/7/17（水）

日本　30（14－7、16－9）16　香港

地元の声援を背に戦う香港との第３戦、互いに守りから速攻へと繋ぎ、11 分までで４対５と追いかける展開で始まる。ここから、尾辻のポスト、相澤のカットイン、川上の速攻など９連取、13 対５とするが、OF ミスから攻撃のペースを落としてしまい、14 対７で折り返す。

後半、攻撃のリズムの悪さを断ち切るべくスタート。中山のミドルで勢いに乗ると、松倉、吉留と速攻が冴えて８連取、22 対７と香港を圧倒する。その後はメンバーを入れ替えながら戦い、安達のポストプレーなど、随所に成長の感じられるゲームとなった。Woman of the match には榎和奏が選ばれた。

■ 2019/7/19（金）

日本　41（19－9、22－12）21　チャイニーズタイペイ

第４戦チャイニーズタイペイとのゲームは、攻守に渡り少し噛み合わない立ち上がり。相手にミドル、スタンディングを打ち込まれ、１対４と追いかける形となる。しかし、７分松倉の速攻を起点に６連取してペースを掴むと、走力で勝る日本はリズムを取り戻して８連取と一気に畳み掛けて完全に試合の主導権を握り、前半を 19 対９で折り返す。

後半、中山からポスト・前田へのパスで得点を決め、セットでもリズムを掴むかに見えたが、DF でのミスが続き７mT を献上してしまい点差が開かない。後半 10 分、ようやく速攻で３連取してペースを掴むと、切通が立て続けにミドルを決めるなど、全員が得点に絡む活躍を見せて快勝、全勝で最終戦を迎えることとなった。Woman of the match に川上真愛が選ばれた。

■ 2019/7/21（日）

日本　24（8－13、16－9）22　韓国

全勝同士の対決となった韓国との最終戦。速攻での先制点を許し、その次の速攻でも７mT を与えてしまい、追いかける立ち上がりとなる。速攻で追いつきたいところだが、韓国の戻りも早く、得点に結び付けられない。相手にペースを掴まれ、セットに持ち込まれると、センターにスタンディングを打ち込まれて差を詰めることができない。セット攻撃の時間が長くなり、相手 GK の好セーブにも阻まれ、ジリジリと差を広げられてしまい、８対 13 と５点ビハインドで前半を折り返す。

後半早々に、吉留がインターセプトで速攻を決めると、中山のミドルで 11 対 14。その後も尾辻、相澤が続けて７mT を獲得、中山がカットインを決め、14 対 15 と１点差に詰め寄る。ここで韓国がタイムアウト。直後、センターのカットインを許すが、相澤のカットイン、前田のポストで追いつき、一気に緊張が高まる。後半 20 分、18 対 18 の同点から、中山が意地のミドルなどで３連取して 21 対 18。追いすがる韓国もサイドなどで得点し、21 対 20 と緊迫したゲーム展開が続く。その後、守り合いとなり、両チームのエースが得点するも、川上がラストシュートを決め、24 対 22、勝利をもぎ取った。Women of the match は、尾辻素乃子が獲得。

女子星取表・最終順位

順位		JPN	KOR	CHN	HKG	THA	TPE	数	勝	分	敗	総得点	総失点	得失点差	勝点
1.	日本(JPN)		24○22	28○21	30○16	38○18	41○21	5	5	0	0	161	98	63	10
2.	韓国(KOR)	22●24		31○18	36○15	45○19	31○14	5	4	0	1	165	90	75	8
3.	中国(CHN)	21●28	18●31		27○19	27○18	31○25	5	3	0	2	124	121	3	6
4.	香港(HKG)	16●30	15●36	19●27		22△22	21○19	5	1	1	3	93	134	-41	3
5.	タイ(THA)	18●38	19●45	18●27	22△22		28△28	5	0	2	3	105	160	-55	2
6.	チャイニーズタイペイ(TPE)	21●41	14●31	25●31	19●21	28△28		5	0	1	4	107	152	-45	1

asics
I MOVE ME™

さらに軽く。

※当社、従来品(THH543)との比較

FLYTEFOAMを搭載し、軽量性も追求したスタビリティモデル

BLAST FF

1071A002 / SIZE：25.0～29.0・30.0cm 本体価格：¥12,800＋税

001
BLACK/SHOCKING ORANGE

412
ILLUSION BLUE/HAZARD GREEN

600
SAMBA/BLACK

アシックスシューズのストライプデザインは株式会社アシックスの登録商標です。
本体価格は消費税抜きのメーカー希望小売価格です。 ■商品についてのお問い合わせ先：アシックスジャパン株式会社お客様相談室 0120-068-806 ■当社ホームページ asics.com からもお問い合わせをしていただけます。

写真提供：スポーツイベント社

高松宮記念杯第70回

全日本高校選手権大会

開催期間：2019年８月４日～８月９日
開 催 地：熊本県・山鹿市、菊池市、玉名市、合志市
会　　場：山鹿市総合体育館、山鹿市鹿本体育館、
オムロンリレーアンドデバイス（株）鹿陽センター、
菊池市総合体育館、玉名市総合体育館、
合志市総合センターヴィーブル

最終順位

【男子】 優　勝：県立香川中央高等学校（香川県）
準優勝：愛知高等学校（愛知県）
３　位：興南高等学校（沖縄県）
瓊浦高等学校（長崎県）

【女子】 優　勝：明光学園高等学校（福岡県）
準優勝：白梅学園高等学校（東京都）
３　位：県立那覇西高等学校（沖縄県）
大分高等学校（大分県）

写真提供：スポーツイベント社

8点共　写真提供：スポーツイベント社

「感動は無限大　南部九州総体2019」を終えて

熊本県高等学校体育連盟ハンドボール専門部 委員長　松本 幸介

はじめに、平成 28 年熊本地震発生から 3 年目を迎え、全国から多くの御支援と温かい御声援をいただき、誠にありがとうございました。この場をお借りして、深くお礼を申し上げます。

さて、ここ火の国熊本の地で「令和元年度全国高等学校総合体育大会ハンドボール競技大会　高松宮記念杯第 70 回全日本高等学校ハンドボール選手権大会」を無事に成功し終了することができました。大会を盛り上げていただいた選手･監督･審判員・関係者の皆様に感謝申し上げます。また、創設 70 周年という節目をこの地で記念式典・祝賀会を挙行できましたことを大変光栄に思います。

本年度の全国高等学校総合体育大会は、「響かせろ我らの魂南の空へ」の大会スローガンの下、鹿児島県･宮崎県･沖縄県･熊本県の南部九州 4 県で開催され、ハンドボール競技は、山鹿市総合体育館をメイン会場とし、山鹿市の 3 会場、玉名市、菊池市、合志市の 3 会場を併せた、6 会場を使用して 8 月 3 日の開会式から 8 月 9 日の決勝戦・閉会式迄の 7 日間の開催となりました。

大会までの準備は、2 年前の福島インターハイ、昨年の三重インターハイを参考に進めてまいりました。本大会では、「選手ファースト」「ハンドボールの魅力を最大限に発揮させる」を念頭に大会を成功させ、さらにここ熊本で 2019 年 11 月から開催される世界女子ハンドボール選手権大会への機運を醸成させるように、『おもてなしの心で、山鹿・玉名・菊池・合志を楽しんで！』を合い言葉に競技・運営役員及び補助役員の皆の心得として、任務を遂行いたしました。福島県の視察後係分担を行い、責任を持って運営できるように研修会・講習会を県内の中学生・高校生の各大会を活用し、また、ハンドボール部員以外の役員・補助役員も動員し、競技運営を進めてまいりました。（公財）全国高体連ハンドボール専門部と協議させていただき、スムーズな運営に努めることができました。

開会式は、山鹿市民交流センターホールにて行い、選手の健康面や会場規模の関係で一部の参加となりました。アトラクションは、山鹿市実行委員会主催による、地元高校生の「山鹿灯籠踊り」の伝統芸能や「おりひめジャパン」のメンバーからの応援メッセージもあり、選手たちも目を輝かせて、より一層やる気が沸き良いスタートを切ることができました。環境面については、空調設備のある体育館やメイン会場にタラフレックスを敷き、また、全会場初日より松ヤニの使用ができるよう、山鹿市･山鹿市ハンドボール協会の御協力の下、最適な環境整備を行うことができました。また、決勝戦には、試合開始のセレモニーとして、山鹿市の保育園児、幼稚園児による「エスコートキッズ」を採用しました。選手と手をつなぎ入場し、ほのぼのとした雰囲気に包まれました。今後更にハンドボールファンが増え、ハンドボールの将来を担う代表選手がこの熊本の地から輩出されることを強く期待します。

８月４日からの試合では、各チーム各都道府県代表としての誇りや日本一を目指してきた力と技を十分に発揮され、白熱した試合展開を数多く見ることができました。また、趣向を凝らした応援や相手を讃える姿が観客や関係者の心に残りました。地元女子チームの熊本市立千原台高校、熊本国府高校の試合では、地元の関係者やハンドボールの魅力を知る地元市民が押し寄せ会場を満員にし、大会を盛り上げていただきました。２日目からは、男子チームの熊本市立千原台高校、熊本国府高校も登場し、高いパフォーマンス力を見せてくれました。４チーム共最後まで諦めることなく観客を熱狂の渦に巻き込み盛り上げてくれました。３日目には、台風８号の接近、上陸により、予定通り開催できるかやきもきしながら待機。午前 11 時に暴風警報が解除、予定より４時間遅れで第一試合目が行われました。しかし、地元補助役員が一部の参加、また、18 時迄の業務としたため、第四試合目は、地元役員や審判団、専門部の御協力の下終了することができました。翌日は、台風の影響と選手の体調等を考慮し、第一試合目を１時間遅らせて開始しました。

最終日の決勝戦は、女子については、春の全国選抜大会と同じ顔合わせ。小柄ながらも運動量とテクニックを武器に春夏連覇を目指す明光学園。対する平均身長が高く、多彩な攻撃力がある白梅学園。前半から両チーム全く互角の戦いでした。ゲームが動いたのは後半、明光が白梅の７人攻撃に対するディフェンスが機能し、速攻が次々と決まり、終盤白梅も４－２のデフェンスで追い上げましたが、明光がそれを振り切り初優勝で春夏連覇を成し遂げました。男子は、第１シードの香川中央。組織力で勝ち上がった愛知との対戦でした。前半から主導権を奪い合う好ゲームで、最終的には、高いディフェンスや GK の活躍により、香川中央が 25 年ぶり２回目の優勝でこちらも春夏連覇を成し遂げました。

最後に、多大な御支援、御指導を頂いた日本ハンドボール協会、全国高体連ハンドボール専門部、熊本県ハンドボール協会、審判員・MO・TD の皆様に感謝を申し上げるとともに、「おもてなしの心」で、早朝より夜遅くまで大会を成功させようと御尽力いただいた役員の皆様や笑顔を絶やさず、献身的に業務を果たしてくれた補助役員の皆さん、「仕事は無限大」と冗談を言いながら準備に労をいとわず共に働いてくださいました山鹿市実行委員会、県ハンドボール専門部の皆様に心より感謝を申し上げます。

OSAKI

mind

豊かな明日を切り開く、大崎マインド。

限られた資源だから、有意義に使っていきたい。
命あるものたちが共存する地球だから、
快適な環境を守っていきたい。
計測・制御の専門メーカーとして時代をリードする大崎は、
ユニークな発想と探究心で省エネ、省力化機器など、
つねに技術革新をこころがけています。

大崎電気工業株式会社

本社　〒141-8646　東京都品川区東五反田2-10-2 東五反田スクエア　TEL.(03)3443-7171(代表)

ECOLOGY

男子優勝 県立香川中央高等学校（香川県）

香川県立香川中央高等学校ハンドボール部主将　田井 健志

まず始めに、高松宮記念杯第 70 回全国高等学校ハンドボール選手権大会の開催にご尽力いただきました関係各位の皆様に深くお礼申し上げます。有り難うございました。

僕達は春の選抜大会を優勝しました。しかし、今まで僕達を指導してくれていた河合先生が異動することになり、高松商業女子ハンドボールチームを率いていた田中先生が、新しい監督として、新体制でのスタートを切ることになりました。指導者は変わったのですが、戸惑いや不安感はなく、逆にどんな練習をするのだろうといった期待感が一杯でした。

実際の練習は、前監督の方法を引き継いだうえで、その練習で気になったことを指導するという僕達にあわせた形にしてくれたので、すぐに馴染むことができました。僕達は毎日の練習や県外遠征を重ねていく中で、選抜大会時の 3:3DF に加え、6:0DF や 5:1DF といったディフェンスシステムから速攻で押し切ることを新しい武器にするために必死で取り組んできました。また、そういった取組みと併せて、60 分間で勝つためにはどうしたらいいのかというテーマを持って実のある練習にすることを心がけました。

春夏二冠がかかったインターハイは決して簡単なものではないと思っていましたが、追われるプレッシャーというのは特に感じませんでした。ただ、田中先生には相当なプレッシャーがあるだろうと思っていました。異動して選抜大会優勝チームの監督になるということは前代未聞なことですが、そんな先生のためにも、優勝し、胴上げするという使命感を持って、王者としてではなく新しいチームとして大会に参加することになりました。

今大会では、練習を重ねた組織的なディフェンスシステムが機能し、準々決勝では 1 点差で逃げ切ることができました。また、準決勝、決勝では追いつかれたり逆転を許したりすることもありましたが、それぞれの役割を果たし、自信を持って戦った結果、優勝をすることができました。

香川中央高校というチームで、最高の仲間と最高のハンドボールをしてインターハイ優勝ができたということは一生の思い出です。僕達は他校と比べて決して大きくない体格ですが、大会を通して粘り強い OF と DF ができ、最高の結果を出すことができたのは、前任の河合先生と後任の田中先生の指導によるものです。もちろん、県外遠征などで他県のチームが練習試合の相手になってくれたこと、後援会の皆様やご支援いただいた先輩方にも感謝しています。有り難うございました。

最後になりましたが、今大会で運営にあたられた大会関係者の皆様、会場で応援してくださった皆様に心よりお礼申し上げます。有り難うございました。

写真提供：スポーツイベント社

女子優勝 明光学園高等学校（福岡県）

明光学園高校女子ハンドボール部主将　柿添 まどか

写真提供：スポーツイベント社

今回の「インターハイ優勝」という結果は、私にとってこれまでにない大切な結果となりました。私達はチームの目標である「三冠」をとるために、春の選抜大会を優勝した時からすぐに目標をインターハイ優勝に切り替え、二冠目をとるために練習に励んできました。しかし、その道のりはそう甘く簡単なものではなく順風に練習は進みませんでした。

一番大きな壁にぶつかったのは６月に行われた九州大会で大分高校に負け準優勝に終わったことです。私たちの代になり、この明光のチームは公式戦で負けなしできていました。

選抜大会で優勝しているのに九州大会で負けてしまった…このままでは三冠どころかインターハイで優勝することなんてできない。焦りと不安が一気に込上げてきました。

練習メニューを新しくするのではなく、一本のシュートの大切さ、今まで先輩達に頼ってきた３年生全員の自分に対する甘さ、何のために明光学園に入学したのか、この夏のインターハイにかける一人一人の思いをもう一度考え見つめ直し、全員が明光という一つのチームが日本一になるためにどうしたらいいかを毎日みんなと本音でぶつかり合い話し合いをしました。

今大会では春の選抜の時とは全く違う試合展開になりました。選抜大会では常に明光がリードし余裕を持ってプレーをすることができましたが、インターハイではそう上手くはいかず、前半から見えないプレッシャーや緊張の連続でなかなかチームの良さを出せず、後半 10 分切ったところまでリードを許してしまうという苦しい試合もありました。

そんな苦しい試合も乗り越えてきたからこそ、準決勝・決勝戦と接戦でも慌てず、自分たちが今までやってきたことを信じてプレーすることができました。

また、今大会は熊本県山鹿市での開催ということで学校からも近いせいもあり連日会場には学校の先生方や在校生、後援会や地域の方々等たくさん応援に駆け付けてくださいました。そのたくさんの応援が力になりました。

優勝できたのは、たくさんの方々に支えら得られたタイトルだと思います。感謝してもしきれないくらいです。

「三冠」まであと一つ。最後の目標を達成するため、限られた時間を大切にしてチャレンジャーのつもりで頑張りたいと思います。

戦評：男子

【準決勝】 香川中央　26（11－11、15－11）22　興南

男子準決勝第一試合は、香川中央のスローオフで試合開始。香川中央は谷のカットインで先制する。対して興南も田仲のサイドシュートで取り返す。香川中央は速いパス回しから谷のロングシュートや堅いディフェンスからの速攻で得点を重ねる。一方、興南は足を使ったディフェンスから速攻や大城のロング、サイドシュート等で得点するなど、目の離せない展開となる。興南は 14 分から 23 分過ぎまで無得点の状態が続き、その間香川中央は 4 連取しリードを広げる。しかし、興南も意地を見せ、池間のサイドシュートや伊禮（雅）、新垣（宏）らのカットインで 3 連取し、GK も相手に流れを渡さないファインセーブを見せ、前半を 11 対 11 で折り返す。

後半に入ると、興南の攻撃にリズムが出始め、香川中央のディフェンスに対応し始める。3 分過ぎに興南がリードし、流れを引き寄せたかと思われたが、香川中央は木太、谷、大須賀らで 3 連取し逆転する。これに対し、興南も伊禮（楓）のカットインで同点に追いつく。その後互いに連取しあう展開となり、香川中央が 3 点リードしたところで興南はタイムアウトを取る。その後興南は伊禮（楓）のカットインや伊禮（雅）のロングシュートで連取し、流れを引き寄せたかと思われたが、香川中央のディフェンスが上手く機能し興南に流れを渡さない。興南は何とか流れを変えようとタイムアウトを取るが流れを取り戻すことができず、26 対 22 で香川中央が勝利し決勝へ駒を進めた。

【準決勝】 愛知　25（10－10、15－8）18　瓊浦

男子準決勝は、瓊浦高校のスローオフでスタート。愛知は 3-2-1 ディフェンスで、高い位置から激しいプレッシャーをかける。瓊浦はファーストシュートを阻まれるも素早い戻りでオフェンスチャージを取る。先制したのは瓊浦サウスポー前田のカットイン。瓊浦は 6-0 ディフェンスで 9m エリア付近を激しく動く。寄り、フォローも軽快で、ワイドにボールを振り、カットインを狙う愛知に得点させない。愛知の初得点は、5 分過ぎ水谷のミドルシュート。7 分が経過し 1 対 1 の引き締まった展開。中盤は瓊浦から動き出す。GK 加藤の好セーブ、前川のポストシュート、前田のカットインから始まり 5 得点。対して愛知も GK 大森の好守、三谷のサイドループシュート、高橋の連続サイドシュートで 6 対 6 に追い上げ、流れを渡さない。終盤愛知は、小林の連続ポストシュートなどで得点するも、瓊浦は井出の絶妙なサイドループシュート、棚町のカットインなどで加点し、10 対 10 の同点で前半終了。

後半は、序盤から愛知がディフェンスからリズムに乗り、中盤まで主導権を握る。ディフェンダー小切間や平田のファイト溢れる詰めやフォローが象徴する。得点も、キャプテン森本の 3 連続得点で一気に 3 点リード。瓊浦は 5 分に棚町のミドルシュートで得点するが、この後は 12 分間無得点。この間愛知は、高橋のサイドシュート、平田の速攻、松野尾のミドルシュートでこの試合最大の 6 点差。瓊浦は、前田が連続得点するも、愛知森本がステップシュートを決め 20 対 16 で再度 6 点差、残り 8 分になったところで瓊浦がタイムアウト。再開後、愛知は 7 人攻撃にチェンジし速水が 7mT を決める。瓊浦は残り 5 分でオールコートプレスをかけ逆転への執念を見せる。松村や GK 加藤のキーパーシュートなどで加点するも、愛知は水谷の巧みなスピンシュートなどで加点する。後半終始ゲームを支配した愛知が 25 対 18 で勝利し、決勝の舞台へ駒を進めた。

【決勝】 香川中央　26（14－8、12－13）21　愛知

男子決勝は愛知県代表の愛知高校と香川県代表の香川中央高校の対戦となった。香川中央のスローオフで試合開始。香川中央は谷のロングシュートで先制する。対する愛知も森本のロングシュートで取り返す。その後も点を取り合い、主導権を奪い合う展開となる。香川中央 1 点リードで迎えた 18 分過ぎ、愛知の攻撃で同点になると思われたが、香川中央 GK 大道のファインセーブで愛知に得点を許さない。その後香川中央が高尾、柳生、木太らで 3 連取し 4 点差とすると、愛知は流れを止めようとタイムアウト。愛知はここで流れを掴むかに思われたが、香川中央の高いディフェンスの前に思うように得点できない。それに対し香川中央は中村、谷らで得点を伸ばし、14 対 8 で前半を終了した。

後半に入ると、愛知にリズムが出て追い上げを許す。ここで愛知に流れが傾くかと思われたが、香川中央は 7 人攻撃を仕掛け、流れを簡単には渡さない。しかし、愛知も 8 分過ぎから 3 連取し、12 分には 1 点差とする。14 分過ぎには愛知森本のミドルシュートでついに同点に追いつく。その後 1 点を争う展開となり、香川中央高尾、木太らで得点を重ね、24 分には 4 点差となる。ここで愛知はタイムアウトを取り、流れを引き寄せようとするが、香川中央は GK 大道が立て続けにファインセーブを見せ得点を許さない。愛知も水谷、打越らで追い上げを見せるも点差は縮まらず、26 対 21 で香川中央が勝利し、25 年ぶり 2 回目の優勝となった。

戦評：女子

【準決勝】 明光学園　24（7－7、17－8）15　那覇西

女子準決勝第一試合、明光学園と那覇西の九州勢同士の一戦は那覇西のスローオフで試合開始。那覇西は喜納のカットインで先制するが、明光学園も白石のカットインで応戦する。その後、1点ずつ取り合い、6分過ぎ明光学園村上のミドルシュートで1点をリードする。その後12分過ぎまで両チームのディフェンスの頑張り、GKの好セーブにより得点を伸ばすことができずに膠着した展開となる。12分過ぎ那覇西上地のミドルシュートで同点になったところでゲームが動き出す。その後、互いに速攻、ミドルシュート等で得点を奪いに行くが、両チームGKの好セーブにより、5分以上得点することができない。終盤両チーム速攻の応酬となったが、得点することができず、前半を7対7の同点で折り返した。

後半に入ると明光学園の攻撃にリズムが出始め、6分過ぎまでに4点を奪う。一方那覇西も砂川のサイドシュートや上地のミドルシュートなどで追い上げを図るが、8分過ぎに退場者を出し4点差となる。那覇西はミドルシュートやサイドシュートで得点を上げるも、明光学園の堅いディフェンスの前に得点を伸ばすことができず、12分過ぎから8分間無得点が続く。その間明光学園は松永、白石らの速攻で5連取し、さらに点差を広げる。その後互いに点を取り合う展開となったが、終盤以降明光学園に速攻が出始め徐々に点差が広がる。終盤、明光学園に退場者が立て続けに出ると那覇西はマンツーマンディフェンスを仕掛け、速攻につなげたいところであったが得点を奪えず、24対15で試合終了。明光学園が勝利し、決勝へ駒を進めた。

【準決勝】 白梅学園　26（15－13、11－9）22　大分

大分高等学校のスローオフ。白梅は4-2ディフェンスで高い位置から堅守を展開。大分は、正確な速いボール回しで高橋（唯）が先制。白梅も小宮山のステップシュートで応戦。白梅の攻撃は、序盤から7人攻撃で、ワイドな速いボール回しからポストやサイドへのパスをだした。前半を通し7mTが4本あり、伊藤は確実にゴールした。対する大分は後藤（ほ）や高橋（舞）、高橋（唯）が得点する。序盤12分で白梅伊藤が2本目の7mTを確実に決め5対5の同点。ここからも取って取られてのシーソーゲームが続く。大分高橋（唯）、後藤（ほ）の鋭いカットインから2点のリードを奪うが、白梅はポストを絡めた攻撃ですぐに追いつく。さらに、徹底した7人攻撃で大分に退場者を誘うプレーで伊藤のポストシュートなどで、終盤22分で11対10と逆転する。大分は後藤（ほ）のカットイン、三浦の絶妙なサイドからのループシュートを決めるも、白梅は平野と青木のサイドシュート、大谷のポストシュートで加点し、15対13の2点リードで前半終了。

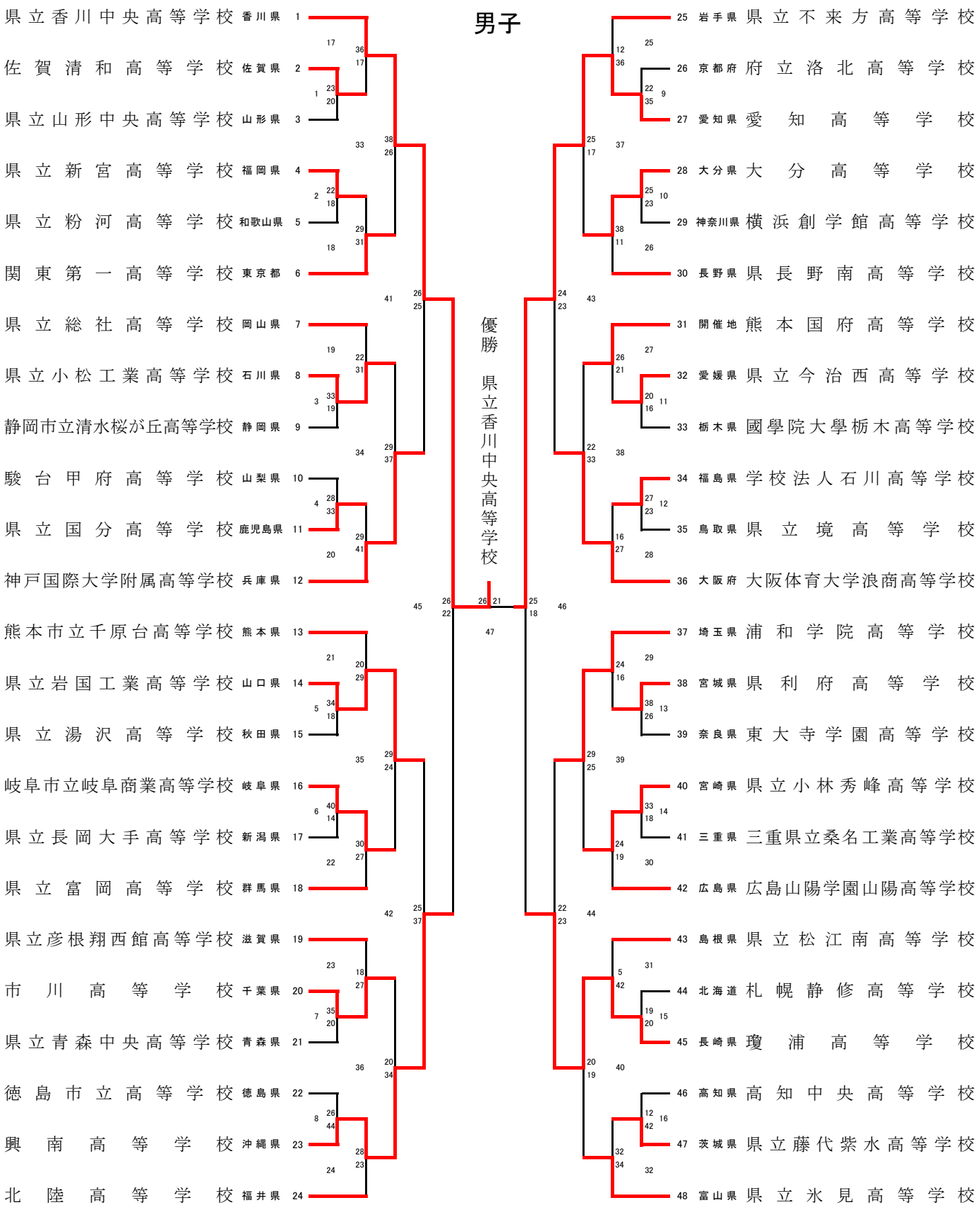
後半の中盤まで、白梅が主導権を握った。出だしは布施のカットイン、ウィング平野の連続サイドシュートで3連続得点。この試合最大の5点差がつき、大分がタイムアウト。大分は、さらに速い足さばきとボール回しでディフェンス突破を試み、清水がポストシュートで得点。しかし、長身選手をトップに据えた白梅のディフェンスは、長い手と豊富なフットワークで大分のバックプレーヤー陣にプレッシャーをかけ続ける。大分のセンター清水の負傷退場もあり、12分経過して、白梅は7点差をつける。対する大分もGK廣田のキーパーシュートが決まり4点差まで追い上げる。終盤、白梅は6人攻撃に切り替え、巧みな手渡し等で攻撃を見せながら、高橋と小宮山がミドルシュートを決める。攻撃的なディフェンスも崩れることはなく、連続失点をしない。速い動きとパスワークで攻め続ける大分も三浦、高橋（舞）、高橋（唯）、山崎で加点するが、白梅も平野、小宮山、布施らが加点し、26対22の4点差で勝利し、決勝の舞台へ駒を進めた。

【決勝】 明光学園　23（12－11、11－9）20　白梅学園

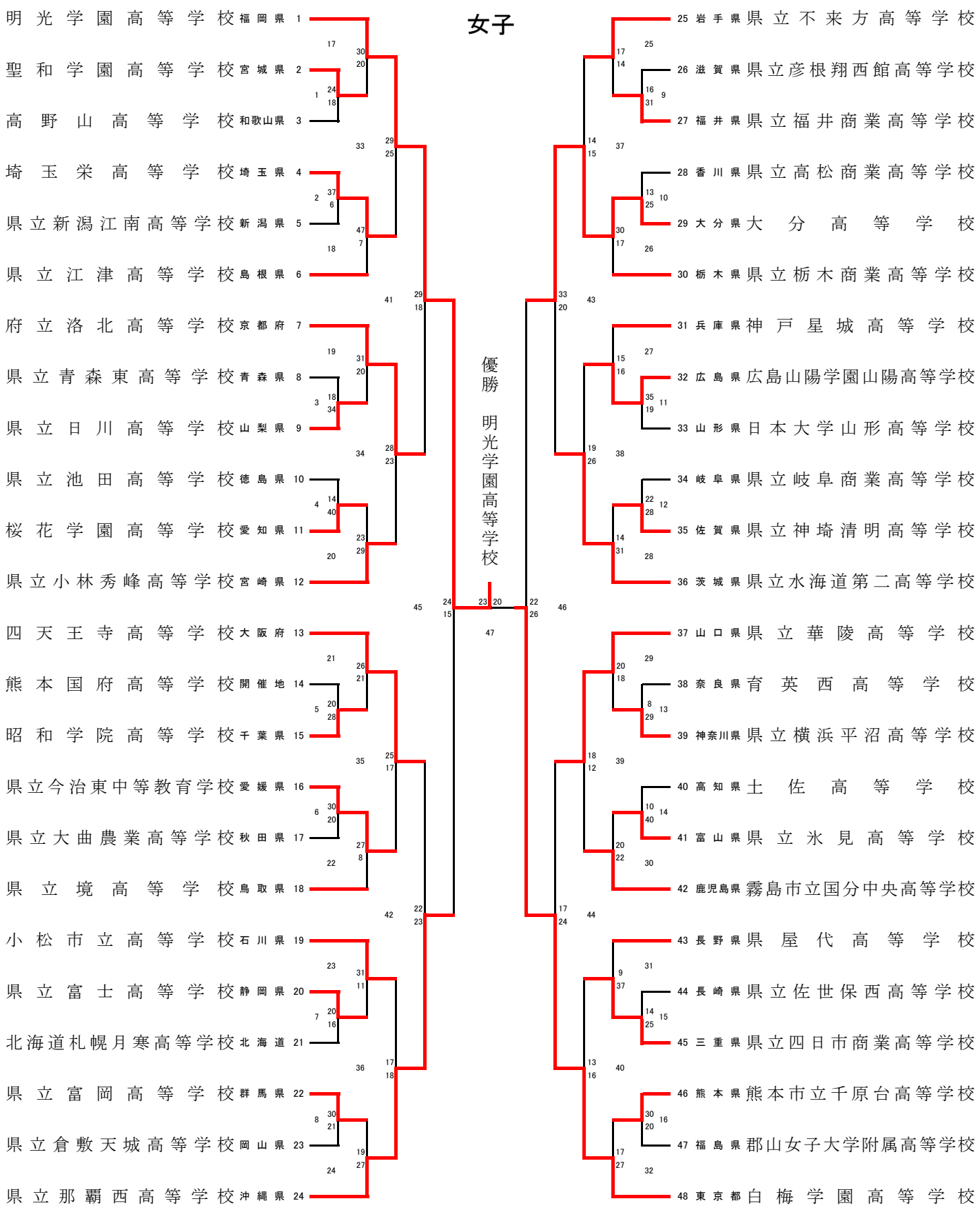
令和元年度インターハイ決勝の組み合わせは、選抜決勝と同カードとなった。前半を終了し、12対11で明光1点のリード、全く互角の戦いである。先制は、巧みなパスワークから白梅小宮山のロングシュート。明光村上のカットインですぐに追いつく。中園を中心に9mエリアを力強く守る明光のディフェンスに、白梅は小宮山のミドル、ウィング平野の速攻で1対3とリードする。白梅は、大谷と伊藤2人のトップディフェンスが厳しいボールチェック。これに明光は村上や中園のカットインなどで応戦。20分過ぎまで9対9の同点。GK柿添が好セーブを連発、中園のポストシュートで加点する。対して、明光の速攻に白梅も素早い戻りで流れを渡さない。絶妙のタイミングの手渡しパスから大谷のサイドシュートや伊藤の7mTで加点しシーソーゲーム。明光平田がサイドから足元を抜くシュートを決め、12対11の僅差で明光がリードする。

後半の序盤は、明光が一気に流れに乗った。白梅の7人攻撃へのディフェンスが機能しだすと、平田の速攻が決まり、村上と中園らが次々と得点。選手交代の間隙を突き、GK柿添のキーパーシュートも決まり、18対12の6点差とした。しかし、中盤は白梅のペース。4-2ディフェンスで再びリズムを掴み始め、布施のカットイン、小宮山のロングシュート、伊藤の確実な7mTにより16対20の4点差に詰め寄る。退場者が出た2分間も無失点。終盤は、速攻をかけ追い上げにかかる白梅に、明光GK柿添が安定したキーピングと好セーブを連発し、流れを引き寄せた。キャプテン高橋のロングシュートや小宮山のミドル、伊藤のポストシュートで得点する白梅に、明光も平田や松永のサイドシュートなどで得点する。観衆を魅了した決勝戦は、23対20で明光が初優勝を飾り、令和の初代王座に就いた。

男子


県立香川中央高等学校 香川県 1
佐賀清和高等学校 佐賀県 2
県立山形中央高等学校 山形県 3
県立新宮高等学校 福岡県 4
県立粉河高等学校 和歌山県 5
関東第一高等学校 東京都 6
県立総社高等学校 岡山県 7
県立小松工業高等学校 石川県 8
静岡市立清水桜が丘高等学校 静岡県 9
駿台甲府高等学校 山梨県 10
県立国分高等学校 鹿児島県 11
神戸国際大学附属高等学校 兵庫県 12
熊本市立千原台高等学校 熊本県 13
県立岩国工業高等学校 山口県 14
県立湯沢高等学校 秋田県 15
岐阜市立岐阜商業高等学校 岐阜県 16
県立長岡大手高等学校 新潟県 17
県立富岡高等学校 群馬県 18
県立彦根翔西館高等学校 滋賀県 19
市川高等学校 千葉県 20
県立青森中央高等学校 青森県 21
徳島市立高等学校 徳島県 22
興南高等学校 沖縄県 23
北陸高等学校 福井県 24
優勝 県立香川中央高等学校
25 岩手県 県立不来方高等学校
26 京都府 府立洛北高等学校
27 愛知県 愛知高等学校
28 大分県 大分高等学校
29 神奈川県 横浜創学館高等学校
30 長野県 県長野南高等学校
31 開催地 熊本国府高等学校
32 愛媛県 県立今治西高等学校
33 栃木県 國學院大學栃木高等学校
34 福島県 学校法人石川高等学校
35 鳥取県 県立境高等学校
36 大阪府 大阪体育大学浪商高等学校
37 埼玉県 浦和学院高等学校
38 宮城県 県利府高等学校
39 奈良県 東大寺学園高等学校
40 宮崎県 県立小林秀峰高等学校
41 三重県 三重県立桑名工業高等学校
42 広島県 広島山陽学園山陽高等学校
43 島根県 県立松江南高等学校
44 北海道 札幌静修高等学校
45 長崎県 瓊浦高等学校
46 高知県 高知中央高等学校
47 茨城県 県立藤代紫水高等学校
48 富山県 県立氷見高等学校

女子


明光学園高等学校 福岡県 1
聖和学園高等学校 宮城県 2
高野山高等学校 和歌山県 3
埼玉栄高等学校 埼玉県 4
県立新潟江南高等学校 新潟県 5
県立江津高等学校 島根県 6
府立洛北高等学校 京都府 7
県立青森東高等学校 青森県 8
県立日川高等学校 山梨県 9
県立池田高等学校 徳島県 10
桜花学園高等学校 愛知県 11
県立小林秀峰高等学校 宮崎県 12
四天王寺高等学校 大阪府 13
熊本国府高等学校 開催地 14
昭和学院高等学校 千葉県 15
県立今治東中等教育学校 愛媛県 16
県立大曲農業高等学校 秋田県 17
県立境高等学校 鳥取県 18
小松市立高等学校 石川県 19
県立富士高等学校 静岡県 20
北海道札幌月寒高等学校 北海道 21
県立富岡高等学校 群馬県 22
県立倉敷天城高等学校 岡山県 23
県立那覇西高等学校 沖縄県 24
25 岩手県 県立不来方高等学校
26 滋賀県 県立彦根翔西館高等学校
27 福井県 県立福井商業高等学校
28 香川県 県立高松商業高等学校
29 大分県 大分高等学校
30 栃木県 県立栃木商業高等学校
31 兵庫県 神戸星城高等学校
32 広島県 広島山陽学園山陽高等学校
33 山形県 日本大学山形高等学校
34 岐阜県 県立岐阜商業高等学校
35 佐賀県 県立神埼清明高等学校
36 茨城県 県立水海道第二高等学校
37 山口県 県立華陵高等学校
38 奈良県 育英西高等学校
39 神奈川県 県立横浜平沼高等学校
40 高知県 土佐高等学校
41 富山県 県立氷見高等学校
42 鹿児島県 霧島市立国分中央高等学校
43 長野県 県屋代高等学校
44 長崎県 県立佐世保西高等学校
45 三重県 県立四日市商業高等学校
46 熊本県 熊本市立千原台高等学校
47 福島県 郡山女子大学附属高等学校
48 東京都 白梅学園高等学校
優勝 明光学園高等学校

第21回全日本ビーチハンドボール選手権大会

最終順位

【男子】

優　勝：東海 Weeds! A（愛知）

準優勝：東海 Weeds! B（愛知）

３　位：MJ クラブ（愛知）

【女子】

優　勝：KUNOICHI（愛知）

準優勝：日本体育大学（東京）

３　位：東海 Weeds!（愛知）

大会を振り返り

沖本 哲郎

昨年に引き続き、愛知県碧南市にある碧南緑地ビーチコートにて、7月20日、21日の二日間、男子６チームトーナメント、女子５チーム総当たりのリーグ戦で大会を実施しました。

梅雨の真っただ中で直前まで雨の予報でしたが、二日間雨に降られることなく、また、怪我人、病人もなく円滑に日程を消化することができたのは運営スタッフのおかげで、大変感謝しております。

昨年に続き、北海道から札幌静修高等学校が男女揃って参戦していただくことができ、試合を重ねるごとに上達していくのがはっきりと分かり、男女ともに社会人チーム相手に１勝を挙げることができ大きな自信になったと思います。今後の活躍にも期待を持てました。

男子の試合は、７試合中、５試合がシュートアウトまでもつれ込む接戦となりましたが、日頃から碧南緑地ビーチコートを拠点に練習を積んだ愛知県勢が上位を占める結果となりました。この結果により、愛知県勢の全国大会200回目の優勝を東海 Weeds!A が達成しました。

女子の試合は、昨年同様に日本体育大学と KUNOICHI が頭一つ抜け出し、無敗同士で最終戦を迎えました。KUNOICHI もまた、碧南緑地ビーチコートにて定期的に練習をしており、経験の差で日本体育大学の追撃を振り切り、KUNOICHI が全勝優勝となりました。

また、動画を Youtube にて公開しておりますのでご覧ください。

男子決勝戦　https://youtu.be/0C5oLBoRNV0　　女子最終戦　https://youtu.be/zZi9F2wsPnk

今大会には湧永会長に２日間視察していただき、今後協会としてもビーチハンドボールにも力を入れていくと力強いお言葉をいただきましたので、普及、強化ともに今まで以上に力を入れていきます。

運営に関しましては、ビーチ専門委員会を中心にご協力していただき、審判、TD をはじめ、本部テントにて円滑にスケジュール管理をしていただきましたことに感謝しております。

最後になりましたが、碧南市様、碧南市スポーツ課様には、大変すばらしい施設を貸していただき、また、１年前から打ち合わせに付き合っていただき大変感謝しております。まだまだビーチハンドボールの認知度が低いですが、今後は他のビーチスポーツも協力して、碧南市がビーチスポーツの拠点となるように普及活動に努めてまいります。株式会社モルテン様には、試合球、電池式の電光掲示器をご準備いただきありがとうございました。今大会に多くの企業様のご厚意で協賛していただいたことに感謝いたします。

昨年以上に、多くのハンドボール関係者、ご家族の方にお越しいただき、予想を上回る盛り上がりとなり、まことにありがとうございました。

男子優勝：東海 Weeds! A（愛知）

東海 Weeds!　島田 恭輔

はじめに、今大会の開催にあたり、ご尽力いただいた関係者の方、ご支援いただいたスポンサー様に感謝いたします。また、大会当日、会場に足を運び応援してくださった方々に御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

私たち東海 Weeds! は東海地方に在住するメンバーを中心に構成され、日本代表経験のある選手も所属しているチームです。今大会の開催場所でもある碧南ビーチコートが昨年完成してからは、定期的に練習を積むことができ、その成果として優勝することができ大変うれしく思います。また、この優勝が愛知県ハンドボール協会の全国大会通算 200 勝という節目の勝利となったことを大変光栄に思います。

今大会を振り返って、準決勝の MJ クラブさんとの試合では 1 セット目、初戦ということで動きに硬さもありシュートミスにより落としてしまいましたが、2 セット目には修正し、持ち前のチーム力によりセットを取ることができたと思います。3 セット目のショットアウトでは GK のビッグセーブもあり勝利することができました。決勝戦では相手の GK の好セーブに大変苦戦しましたが、経験、練習、そして運の差で勝利を掴むことができたと感じました。

今大会では 3 セット目のショットアウトまでもつれ込む試合が多く、国内のレベルも向上してきていると感じました。今後も国内のレベルは上がっていくと思いますので、東海 Weeds! としても更なるレベルアップを目指し、ビーチハンドボールを盛り上げていきたいと思います。

女子優勝：KUNOICHI（愛知）

KUNOICHI　大沢　萌

はじめに、大会関係者の方々および大会準備、運営、進行を進めてくださった皆様のおかげで、無事大会を行えたことにチーム一同感謝しております。

台風の影響もあり天候に不安はありましたが、両日共に天候に恵まれ大会を行うことが出来ました。私たちの熱意が天候にも伝わっているのだと感じました。

今大会では愛知県ハンドボール協会所属チームの全国大会 200 勝目 201 勝目がかかっており、私ども KUNOICHI もその記念すべき記録に名を残そうと大会前からメンバー全員がこの勝利を狙っていました。全国大会 200 勝目 201 勝目をこの大会で手に入れたことはとても喜ばしいです。大会最後、優勝カップを手にとったメンバー全員の表情は笑顔で満ち溢れていました。

試合ではビーチハンドボール特有の 2 点プレーで得点を重ねることができました。試合中スカイプレーをして得点を取る場面があったのですが、チームメイトが息のあったパスとシュートを決めた時の喜びはとても大きかったです。今回の大会では、1 人プレーでなく息を合わせたコンビネーションプレーをコミュニケーションを取りながら行うことが出来ました。2 日間の試合の中でさらに成長できたと思います。練習を重ね、試合でコンビネーションプレーが出来たときはとても嬉しいです。練習することで成長でき、やりがいを感じます。メンバー同士の声のかけあいだけでなく、監督、コーチからのアドバイスもありうまく試合運びができました。監督とコーチはいつもチームの雰囲気をみて盛り上げてくださいます。メンバー 10 人、監督、コーチと、このように大会に出場し、ビーチハンドボールを行えることがとても幸せです。

全日本ビーチハンドボール選手権大会後も KUNOICHI はビーチハンドボールの普及と発展を願い、レベルアップできるよう頑張ります。応援してくださった皆様ありがとうございました。

戦　評

7月21日（日）：男子３位決定戦　MJクラブ　2（16－12、14－16、8－6）1　BBJ

第１セットは、ジャンプボールをMJクラブが取り、高木の２点シュートでスタート。その後も比嘉、高木、大場が着実に得点を重ねる。BBJは、シュートミス、チャージングなどでなかなか得点できず。しかし、高良のスピンシュート、高野のインフライトシュートで加点。両チームとも精度の高いシュートで加点していく。BBJ松永、奥野のシュートで４点差とする。残り１分16秒でBBJがタイムアウト、残り30秒でMJクラブがタイムアウト。お互い攻めあぐね16対12で第１セットはMJクラブが取る。

第２セットは、MJクラブ比嘉のスペシャリストシュートで始まる。その後も連続得点で６対０とリード。BBJはシュートミスが続くが、高良のスピンシュートでくらいつく。お互い激しいプレーで目まぐるしく、早い展開となる。BBJはインフライトシュートでくらいつくも､MJクラブ橋野の正確なシュートで突き放す。BBJも高良の滞空時間の長いスピンシュートで加点。残り３分を切り、BBJ#3が２回目の退場で失格。BBJ松永がフェイントで相手をかわすもシュートは枠外へ。残り５秒でBBJ緒方のスピンシュートが決まり同点となり、ゴールデンゴールの延長戦へ。ジャンプボールはMJクラブが触るもサイドラインを割り、BBJのボールとなり、そのまま高野のシュートが決まり、第２セットはBBJが取る。

シュートアウトは、MJクラブの先攻で始まる。MJクラブが３人目金田が外し、BBJは４人目緒方が外し、６対６でBBJの５人目大橋が外し、MJクラブの勝利。見ごたえのあるパワフルなゲームであった。

7月21日（日）：男子決勝戦　東海Weeds!A　2（20－10、10－18、10－8）1　東海Weeds!B

第１セットは、東海Weeds!A中原のスピンシュートで始まり、伊藤のダイレクトシュートで４対０とする。東海Weeds!Bも林のスピンシュートで追い上げる。その後、お互いにスペシャリストシュートが決まり、一進一退のゲームとなる。東海Weeds!Aは高橋のスカイシュート、#8中原のスピンシュートでリードを広げる。東海Weeds!Aは中野陽のスペシャリストシュートが決まり、GK伊藤の好セーブもあり、10対20で東海Weeds!Aが第１セットを取る。

第２セットは､東海Weeds!B加藤のスペシャリストシュートで始まる。GK宮澤の好セーブ＆ダイレクトシュートでリードを広げ、５分で８対０の展開に。残り１分20秒で16対６と東海Weeds!Bが大きくリード。東海Weeds!Bのポストプレーが決まり、逆に東海Weeds!Aのポストは厳しいマークに合い、思うようなプレーができなかった。18対10で第２セットは東海Weeds!Bが取り、シュートアウトへ。

シュートアウトは東海Weeds!Bが先攻で始まる。6-4と東海Weeds!Bが２点リードで５人目を迎え､加藤のシュートは枠の外へ。東海Weeds!A中野が落ち着いてスピンシュートを決め、サドンデスの延長戦へ。先攻後攻が入れ替わり、８人目までもつれ込むと、東海Weeds!A中原がスピンシュートを決め、GKに入った中野陽が積極的に前に出て間合いを詰め、東海Weeds!B小林のシュートは枠の外となり、東海Weeds!Aが勝利し、愛知県勢200個目の全国優勝を達成した。

7月21日（日）：女子３位決定戦　東海Weeds!　2（11－6、10－6）0　ハミングバード

第１セット、立ち上がり、固さが目立つ両チーム、開始から５分で２対２とロースコアの展開となる。ハミングバードの不正交代で流れが変わるかと思われたが、お互いにミスが続き、得点が伸びない。残り２分、長谷川のインフライトシュートと河合のスペシャリストシュートで連続得点を挙げ、東海Weeds!が11対６として第１セットを取る。

第２セット、反撃を試みるハミングバードであったが、GK矢原の好守に阻まれ、苦しい展開となる。多彩な攻撃を見せる東海Weeds!が５分で６対０とリードする。ディフェンスにおいても川畑が３本連続でシュートシャットをし、ハミングバードの攻撃を食い止める。ハミングバードも河口､金田のスピンシュートで応戦するも追いつけず､10対６で東海Weeds!が第２セットも取り、勝利した。

7月21日（日）：女子決勝戦　KUNOICHI　2（18－7、20－18）0　日本体育大学

第１セット、KUNOICHIの谷川のスペシャリストシュートからゲームスタート。日本体育大学は、１本目のシュートがなかなか決まらず、リズムが掴めなかった。KUNOICHIの柴田、森田のシュートシャットが冴え、日本体育大学のシュートが阻止され、中谷、星野のインフライトシュートで得点を重ねたKUNOICHIが第１セットを取った。

第２セット、KUNOICHI中谷、加藤のスピンシュートで先行すると、日本体育大学は、渡邊が１点シュートを決め、嫌なリズムを払拭すると、お互い点を取り合いシーソーゲームとなる。日本体育大学はインフライトシュートの際に得た６mペナルティシュートを成嶋が決め、続いて渡邊がインフライトシュートを決め、１点差と詰め寄る。しかし、KUNOICHI谷川、星野、中谷、加藤と立て続けにスピンシュートを決め、リードを維持する。日本体育大学鈴木のスペシャリストシュート、行本のスピンシュートで最後の最後まで粘りを見せたが、追いつけず、KUNOICHIが第２セットも取り、全勝優勝となった。

用語解説

インフライトシュート：空中でボールをキャッチして、着地する前にシュートすることです。決まれば２点となります。
スピンシュート：ジャンプして空中で360度回転してシュートすることです。決まれば２点となります。
スペシャリストシュート：プレイングエリアに出たゴールキーパーのことをスペシャリストと称し、スペシャリストが撃ったシュートのことです。決まれば２点となります。
ダイレクトシュート：ゴールエリアからゴールキーパーが撃ったシュートのことです。決まれば２点となります。
シュートシャット：ディフェンスが6mラインの外からゴールエリア内に飛んで、ゴールエリアに着地する前にシュートをブロックすることです。
シュートアウト：セットポイントが１対１の場合に、ワンマン速攻の形でシューターとゴールキーパーが対戦することです。

第27回全日本マスターズ大会
《総合型》（交流・順位同時）

開催期間：2019年８月２日～８月４日
開 催 地：北海道・札幌市、江別市
会　　場：飛鳥山公園多目的市民広場（11人制）
江別市民会館（開会式）・江別市民体育館
野幌総合運動公園総合体育館
札幌学院大学総合体育館
北海道野幌高校体育館・札幌国際大学体育館
東海大学札幌キャンパス体育館

■男子順位決定型

優勝　トヨタ紡織九州レッドインパルス
２位　湘南シーガルス
３位　大阪 330HC
４位　G・G 北海道
５位　小松オールウェイズ
６位　H.C.Million OB
７位　HC メーヴェン

■ 11 人制大会

優勝　横浜平沼マスターズ・HC みやびマスターズ・湘南シーガルズ
２位　台北女子手球隊
３位　広尾クラブ・HCみやびマスターズ・葵クラブ・松門会
４位　HC 名古屋 ATF-B・中部ドリームス
５位　LBC アルバトロス・MMCM・送球男子
６位　HC 名古屋 ATF-A

全日本マスターズハンドボール北海道大会実行委員会
（マスターズ専門委員会 全国委員）　**山崎 英一**

令和初、北海道ブロック初の第 27 回全日本マスターズ大会が８月２日（金）から８月４日（日）の３日間、札幌市２ヶ所、江別市５カ所の計７つの会場で１１人制大会、順位決定型男子（７チーム）、交流型男女（39 チーム）、オープン参加１チームを含めた合計 47 チーム、506 名の選手が参加して開催されました。

本州に較べれば低いとはいえ、連日 30 度越えの気温の中、他都府県の選手が「風が気持ちいい」「涼しいですね」と発する言葉に少々違和感を覚えながら、我々大会実行委員会のスタッフは運営を進めていきました。

大会初日８月２日の午前中に始まった 11 人制大会は参加者 91 名を単独チームと混成チームの６チームに分け、トーナメントで争いましたが、横浜平沼マスターズ・HC みやびマスターズ・湘南シーガルズの合同チームが優勝して全日本マスターズ大会の口火をきりました。

11 人制大会後に行われた開会式・競技運営委員会は、JR

の鉄道事故に巻き込まれた複数のチームが開始に間に合わないというハプニングに見舞われましたが、粛々と行われ、開催地の一つ、江別市副市長から歓迎の言葉を受け、競技運営に関する情報共有を行い、翌日からの競技開始に向け、参加チームが北海道で一つに纏まったと感じました。

８月３日（土）から４日（日）の２日間は、野幌総合運動公園総合体育館で順位決定型男子、以外の５会場で交流型男女の競技が行われ、３日には江別市民体育館で子ども向けのイベントも開催しました。イベントにはオーバー 60 の選手が加わり、江別のご当地キャラ（えべチュン）も登場して、試合や 7mT 合戦など、大会参加者の子供達、地元少年団の子供達に楽しい時間を提供出来たように思います。

３日夜に行われた懇親会は日本協会副会長 野呂洋子様を始めとして 247 名の方が出席し、ホテルエミシア札幌で行われました。

懇親会の余興では沖縄県のマミーズの「パプリカ」、会場全体を巻き込んだ台湾女子チーム総出の踊り、札幌からはよさこいソーランチーム 18 名の和楽器を使った演舞などがあり、盛り上がりといった点では、私が今まで参加した大会の懇親会には負けていないように感じました。

４日大会最終日、順位決定型男子のトヨタ紡織九州レッドインパルスが初出場、初優勝を成し遂げました。決勝戦を観戦した野呂副会長が閉会式で「迫力がある」と感想を述べられたように決勝戦は、本大会の最後を飾る試合として相応しいものでした。

本大会は分散会場、ハンドボールコートが２面以上とれるフロアを持つ体育館が一つもないという条件下で開催されましたが、各競技日に会場移動がないように試合が組まれていたこと、この大会の特長の一つ、参加チームによる審判・オフィシャルが浸透していることから、競技進行は想定以上にスームズで、予定時間内に競技を終えることが出来ました。

今、大会を振り返りますと、実行委員会のスタッフ 23 名は１年以上前に準備を始め、多くのことに悪戦苦闘しながらも、全ての試合を予定通りに始め、終えることが出来ました。当たり前と言われれば、それまでですが、全日本という名の付く大会を運営するのは初めてのスタッフばかり、いくら手作りの大会、寛容の気持ちを持って臨む大会とはいえ、各々が 25 年を超える大会の積み重ねと地方大会では経験の出来ないことにつぶれそうになりながら、出来る範囲で最大限の力を尽くしたといえます。

最後に、本大会において、行き届かない点が多々ありましたことを、深くお詫び致します。

そして、参加選手、チーム役員及びご家族の皆様、ご指導、ご支援、ご協力を頂いた全ての方々に感謝の気持ちを述べさせて頂きます。本当にありがとうございました。

熊本通信

2019女子ハンドボール世界選手権大会の交通情報を掲載しました！！

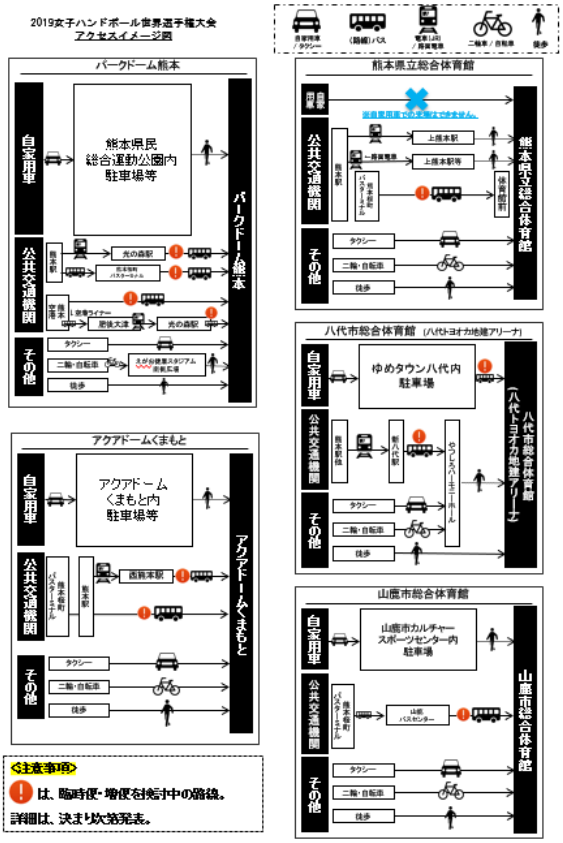
「2019 女子ハンドボール世界選手権大会」の開催まで残り約 3 か月となりました。熊本国際スポーツ大会推進事務局では、観客の皆様へのアクセス情報のご案内として、2019 女子ハンドボール世界選手権大会の公式 HP「交通（ACCESS)」に交通情報第 1 弾を掲載しています！！

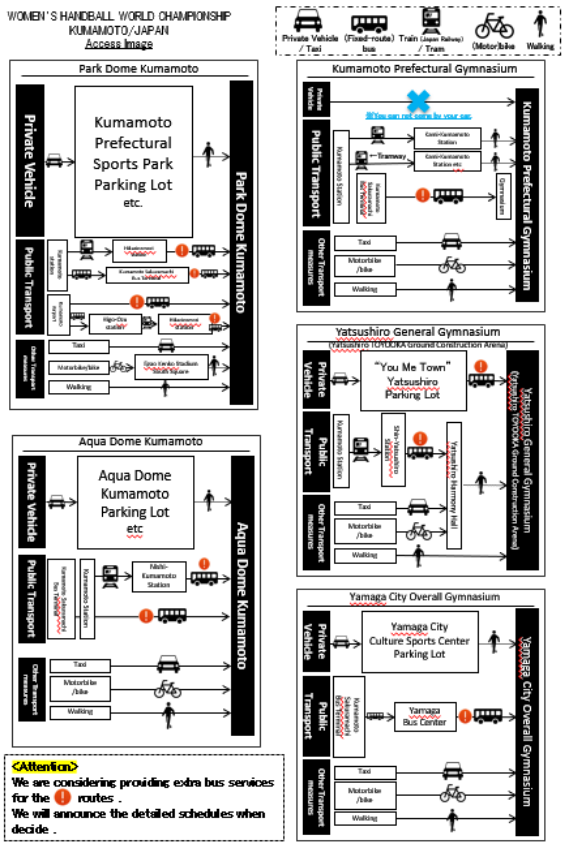
2019 女子ハンドボール世界選手権大会公式 HP 内 “交通 (ACCESS)”

URL　https://japanhandball2019.com/access/

会場である、パークドーム熊本、アクアドームくまもと、熊本県立総合体育館、八代市総合体育館（八代トヨオカ地建アリーナ)、山鹿市総合体育館への各アクセスルートをまとめています。

※日本語版、英語版で掲載しています。





今後とも、当大会関連情報の周知徹底並びに観戦者の皆様が安全かつ円滑に来場できるよう準備を進めてまいります。
皆様のご来場を心よりお待ちしております。

24th IHF WOMEN'S HANDBALL WORLD CHAMPIONSHIP KUMAMOTO / JAPAN 2019

Hand in Hand
1つのボールが世界を結ぶ

マッチスケジュール

会場	パークドーム熊本	アクアドームくまもと	熊本県立総合体育館	八代市総合体育館	山鹿市総合体育館
11/30(土)	13:30 開会式 15:00 JPN ● VS ARG 18:00 RUS VS CHN 20:30 SWE VS COD	15:00 SRB VS ANG 18:00 NED VS SLO 20:30 NOR VS CUB	18:00 ROU VS ESP 20:30 DEN VS AUS	15:00 MNE VS SEN 18:00 HUN VS KAZ	15:00 GER VS BRA 18:00 FRA VS KOR
12/1(日)			18:00 ESP VS HUN 20:30 KOR VS DEN	15:00 KAZ VS MNE 18:00 SEN VS ROU	15:00 BRA VS FRA 18:00 AUS VS GER
12/2(月)	15:00 ARG VS RUS 18:00 COD VS ●JPN 20:30 CHN VS SWE	12:30 CUB VS SRB 15:00 ANG VS NED 20:30 SLO VS NOR			
12/3(火)	14:30 RUS VS COD 17:00 CHN VS ARG 19:30 SWE VS ●JPN	15:00 NED VS CUB 18:00 SLO VS ANG 20:30 NOR VS SRB	15:00 HUN VS MNE 20:30 DEN VS GER	15:00 ESP VS SEN 19:00 ROU VS KAZ	15:00 KOR VS BRA 19:00 FRA VS AUS
12/4(水)			15:00 MNE VS ROU 20:30 DEN VS BRA	15:00 KAZ VS ESP 19:00 HUN VS SEN	15:00 AUS VS KOR 19:00 GER VS FRA
12/5(木)	15:00 COD VS CHN 18:00 JPN ● VS RUS 20:30 SWE VS ARG	15:00 CUB VS SLO 18:00 SRB VS NED 20:30 NOR VS ANG			
12/6(金)	15:00 JPN ● VS CHN 18:00 ARG VS COD 20:30 RUS VS SWE	15:00 SRB VS SLO 18:00 ANG VS CUB 20:30 NED VS NOR	15:00 SEN VS KAZ 20:30 FRA VS DEN	15:00 MNE VS ESP 19:00 ROU VS HUN	15:00 BRA VS AUS 19:00 GER VS KOR
12/7(土)					
12/8(日)	12:30 グループC4位 VS グループD4位 グループC2位 VS グループD3位 グループC3位 VS グループD1位 グループC1位 VS グループD2位	12:30 グループA4位 VS グループB4位 グループA2位 VS グループB3位 グループA3位 VS グループB1位 グループA1位 VS グループB2位	10:00 グループA6位 VS グループB6位 12:30 グループC6位 VS グループD6位 15:00 グループA5位 VS グループB5位 18:00 グループC5位 VS グループD5位		
12/9(月)	12:30 23-24位決定戦 15:00 15-16位決定戦 18:00 13-14位決定戦	グループB1位 VS グループA2位 グループB2位 VS グループA3位 グループB3位 VS グループA1位	12:30 21-22位決定戦 15:00 19-20位決定戦 18:00 17-18位決定戦		
12/10(火)	グループD2位 VS グループC3位 グループD3位 VS グループC1位 グループD1位 VS グループC2位				
12/11(水)	グループC3位 VS グループD3位 グループC2位 VS グループD2位 グループC1位 VS グループD1位	グループA3位 VS グループB3位 グループA2位 VS グループB2位 グループA1位 VS グループB1位			
12/12(木)					
12/13(金)	11:30 7-8位決定戦 14:30 5-6位決定戦 17:30 準決勝1 20:30 準決勝2				
12/14(土)					
12/15(日)	17:30 3位決定戦 20:30 決勝戦 閉会式は決勝戦終了後に開催予定。				

★メインラウンドの試合開始時間は15:00、18:00、20:30です。
試合開始時刻は予選ラウンド終了後に割り当てられます。

★国際ハンドボール連盟は開催、
試合開始時間と試合割り当てを変更する権利を有しています。

出場国

グループA
- NED オランダ
- NOR ノルウェー
- SRB セルビア
- SLO スロベニア
- ANG アンゴラ
- CUB キューバ

グループB
- FRA フランス
- DEN デンマーク
- GER ドイツ
- KOR 韓国
- BRA ブラジル
- AUS オーストラリア

グループC
- ROU ルーマニア
- HUN ハンガリー
- MNE モンテネグロ
- ESP スペイン
- SEN セネガル
- KAZ カザフスタン

グループD
- RUS ロシア
- SWE スウェーデン
- JPN 日本
- CHN 中国
- ARG アルゼンチン
- COD DRコンゴ

予選ラウンド
プレジデントカップ（13-24位決定戦）
メインラウンド
5-8位決定戦　ファイナルラウンド

2019 女子ハンドボール世界選手権大会

1日券

ゲームカテゴリー	区分	カテゴリーS（指定席） 前売	カテゴリーS 当日	カテゴリーA（自由席） 前売	カテゴリーA 当日	カテゴリーB（自由席） 前売	カテゴリーB 当日	車椅子席（エリア指定） 前売	車椅子席 当日
ファイナルラウンド（決勝戦・3位決定戦）	大人	¥8,000	¥10,000	¥5,000	¥7,000	¥3,000	¥4,000	¥3,000	¥4,000
	小中高			¥2,500	¥3,500	¥1,500	¥2,000	¥1,500	¥2,000
ファイナルラウンド（準決勝戦・5-8位決定戦）	大人	¥6,000	¥8,000	¥4,000	¥5,000	¥2,500	¥3,500	¥2,500	¥3,500
	小中高			¥2,000	¥2,500	¥1,200	¥1,700	¥1,200	¥1,700
メインラウンド	大人	¥4,000	¥5,000	¥3,000	¥4,000	¥2,000	¥3,000	¥2,000	¥3,000
	小中高			¥1,500	¥2,000	¥1,000	¥1,500	¥1,000	¥1,500
予選ラウンド（日本戦含む）パークドーム熊本	大人	¥4,000	¥5,000	¥3,000	¥4,000	¥2,000	¥3,000	¥2,000	¥3,000
	小中高			¥1,500	¥2,000	¥1,000	¥1,500	¥1,000	¥1,500
予選ラウンド アクアドームくまもと・熊本県立総合体育館・八代市総合体育館・山鹿市総合体育館	大人	¥2,000	¥3,000	¥1,500	¥2,000	-	-	¥1,500	¥2,000
	小中高			¥700	¥1,000	-	-	¥700	¥1,000
プレジデントカップ（13-24位決定戦）	大人	¥1,500	¥2,000	¥1,000	¥1,500	-	-	¥1,000	¥1,500
	小中高			¥500	¥700	-	-	¥500	¥700

：未就学児童は椅子観戦に限り入場無料です。但し、席が必要な場合は小中高チケットが必要になります。　車椅子席は介添人1名無料になります。　：団体割引（10枚以上の購入で、20%の割引が適用されます。　：家族割：小中高生1名につき大人1名分に対し、小中高価格を適用します。但し、準決勝戦・決勝戦は適用外となります。

会場パッケージ
（予選ラウンドのみ対象・前売りのみの販売となります。）

会場	開催日数（予選）	試合数（予選）	S席（指定席）	A席（自由席）	車椅子席（エリア指定）
パークドーム熊本（日本戦含む）	5日間	15試合	¥14,000	¥10,000	¥10,000
アクアドームくまもと	5日間	15試合	¥7,000	¥5,000	¥5,000
熊本県立総合体育館	5日間	10試合	¥7,000	¥5,000	¥5,000
八代市総合体育館	5日間	10試合	¥7,000	¥5,000	¥5,000
山鹿市総合体育館	5日間	10試合	¥7,000	¥5,000	¥5,000

ホスピタリティチケット
（パークドーム熊本のみ）

ゲームカテゴリー	利用料
ファイナルラウンド	¥100,000
メインラウンド	¥80,000
予選ラウンド	¥60,000
プレジデントカップ	¥60,000

・4名様テーブルでの販売となります。
・1申込チケット4枚迄。
・飲食、グッズの提供があります。

企画チケット
「ハッピーアワーチケット」

平日の全会場及び土日の一部の会場限定で販売します。2試合目以降に入場できるチケットです。金額は1日券と同じですが、各会場のファンゾーンで使えるお得なクーポン券がついています。
※対象日のカテゴリーA,Bのみの販売となります。

特典：クーポン券
大人500円・小中高300円

チケット お申込み方法

1. オフィシャルサイトにアクセス（2019女子ハンド 検索）
2. 希望チケットをお申込みください！
3. 申込完了メールが到着！
4. コンビニエンスストアにてお支払い！（ローソン・ファミリーマート・セブンイレブンのお店と、お近くのお店でお支払い。）

※チケット料金はすべて税込です。※チケット販売方法等は除勝変更になる場合がございます。最新の情報はオフィシャルサイトにてご確認ください。※在庫のないチケットでも在庫の変動により購入可能になることがあります。

お問い合わせ／チケットカスタマーセンター TEL050-5433-1080

あなたの元気を未来につなぐ Wakunaga
元気、やる気、
笑顔、湧く。

《販売名》
キヨーレオピンw

滋養強壮
虚弱体質

第3類医薬品

《販売名》
レオピンファイブw

湧永製薬株式会社
http://www.wakunaga.co.jp/
お取扱店のお問い合わせ 0120-39-0971
（通話料無料）　受付時間 9:00～12:00・13:00～17:00（土日祝日を除く）